
俺のテンプレ

naka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺のテンプレ

【Nコード】

N1451Y

【作者名】

naka

【あらすじ】

とある時、とある集落の農民一家に転生テンプレしてきた男ゲイル。

その彼の家が権利を持つ畑に突如あらわれたダンジョンと呼ばれる洞窟。その時から彼の人生は一転した。

彼に襲いかかる幾多の試練。家族との別れ。

その先に何が待っているのだろうか。

前フリ（前書き）

あらすじは映画の予告編なみに話を盛っております故、ご了承ください

前フリ

俺の新しい名前はゲイルだ。
俺は前世は鈴木太郎だった。
そんな俺がテンプレした。

転生して十一年。立派なチビッコからクソガキへと転職した俺。
とある日の事だ。俺の家の畑に突然ダンジョンの入り口が出来て
いた。

朝起きて、水を汲みに横を通り掛かったら、畑の中央がもっこりし
ているのである。遠くから見てもなんか変だなーと感じていたけれ
ども、まさかなーという思いで、それはやっぱり現実だった。

ダンジョンが生産されるのは珍しいけれども、無くはない事らしい。
突如ダンジョンがあらわれるその原理は知らないが、魔法がどうの
ここの、歪みがどーたらこーたらで、世界が云々なんだろう。

だが、そんな事はどうでもいい。今期の予想収穫量と税の計算にエ
ラーが発生するのだ。これは大問題である。

さらに問題は続いた。俺の家の畑の土地が国に没収されたのだ。そ
のダンジョンが出来た畑の部分が接收される。
しかも、その周りのつい先日種蒔きしたばかりの畑が大量に来襲し
てきた無法集団冒険者らに踏み荒らされていく。

「ダンジョンだぜひゃっはー」

ぐぬぬ。

お前ら、お前らちょっと待て。

お前らが今歩いてるその下は俺の家の畑だ。もう少し、配慮して歩
け。と言いたい。

言いたいけれどもゲイルくん11歳、どうみても勝てません。ありがとうございます。

今日も悔しさに枕を涙で濡らして寝ていると、夢の中でテンプレが起きた。

力をくれるというので貰っておいた。起きたら楽しみだ。

次の日なのか今日の事なのかは知らんけれども、朝だ。

俺はまだ眠たいのだ。眼をこすりながら食卓につき、ファミリーで朝食をとる。

あんな、毎日ファミリーで食事すんねんで、毎日、同じ顔が揃って、似たようなもん食べて、同じ日常やん。それってとっても素敵やん。

固いパンをセツセツと齧り、家畜の乳で流し込み、水汲みの桶を担いで今日も畑の様子を見に行く。

畑はとても残念な事になっていた。

俺の怒りは頂点を突破した。

「き、きしゃまー、どしよくで畑踏み荒らしやがってー。もう勘弁ならねーぜ」

俺が昨日から今日にかけて付与された第一の能力『眼からとっても凄い熱線が放たれる』を使って、冒険者を駆逐していく。

「きゃっ、熱っ」

「がははは温いぞ坊主」

……くつそ。

今の俺の能力では火の粉ぐらいの熱量しか出せないのか。
クソガキを見るような視線をおくる無法者。

負けた様な気がして、恥ずかしくなった俺はそこから去った。

その後、冷静になった頭で考えると、彼らはまだ優しいかったけれども、アラクレ者にレーザー放っていたかと思うとガクブルものである。アーッ！！ラクレ者が混じっていないくて良かったんだぜ。

その晩。

またテンプレは起きなかったが、能力付与主が再度やってきて、強くなりなさいと俺に言った。

その能力でも強くなったら可愛い女の子の衣類だけを除けるだろう、とも言った。

俺はその言葉を信じ、励む事にした。

励むにしても家の農地はない。何に励めば良いのだろうか。

畑がダンジョンになったなら、畑の変わりにそのダンジョンで頑張ればいいじゃないか。

だがちょっと待って欲しい。

はたして集落の同世代とチャンバラとか野山を駆け巡った事ぐらいと農作業しか運動していなかった俺が屈強な無法者らでさえも傷だらけになったりするダンジョンで生還出来るのだろうか。

残念ながら希望は少ないだろう。

けれども時には慎重だけではなく、勇気を持って進む事も重要なのではないかと思われる。

となればダンジョンに行くべきなのではないだろうか。

皆が眠静まった夜。窓から外へと抜け出しダンジョンへ行っただが灯

りがないので俺は帰ってまた寝た。

翌日の昼。家族に遊びに行ってくるといって再度ダンジョンへ。昼でも暗かったので、奥に行ってもしょうがないから入り口付近でさっさと引き返して友達と遊ぶ事にした。

そしたらダンジョン探索者のお兄さんが暇そうに集落を歩いていたので、皆で近寄って剣術を教えてもらった。楽しかった。

次の日。

目からレーザーを出してみると、威力があがっていた。具体的に言うと、木の板を焦がせるぐらい。多分あがってる。そう思いたい。

俺は朝食のパンにショートカットの元気そうな娘っ子のイラストをレーザーを使って書いていたら父親に食べ物で遊ぶなとポカリと拳骨を落とされた。

それはごもつともである。俺の考えも変わらない。

ちなみに、そのイラストは絵心が俺にはないためになんとも言えない宇宙人の様な不思議なイラストとなってしまうていた。そのパンは俺がちゃんとしたきました。

食後。

俺が畑にまく水を汲みに桶を取ろうと立ち上がったら、

「所でなんでお前は目から魔法使っているんだ」

と、聞いてきたので

「魔法なんすかそれ？」

と返したら、また拳骨をポカリとやられた。

親に向かってその口はなんだ、と。

痛む頭を擦りさながら俺は魔法かどうかはわからないけれども、出せ
てしまうのだから出しただけで、俺もいまいちわかっていないとい
う事を言ったら、父ちゃん黙っちゃった。

そら、こういう言い方はアレだが俺以外は無学だもんな。俺の知識
もここではたいして役に立たんし、俺の頭も悪いから変わりはいま
りないのだけでもね。

父親が何を考えているのかはわからないけれども、俺がそれを見て
いてもしょうがないので暇そうにしていた弟らと一緒に水を汲みに
行くことにした。

道中、あんちゃん目から魔法出してマジカッコイイーという弟の称
賛がとても嬉しかったです。

畑に水を撒いて、雑草を軽く刈って今日のワークはフィニッシュ。
良い汗かいたぜ。ふう。

俺が満足感に浸っていると元家の畑の方から悲鳴が聞こえてきた。

「きゃー。ダンジョンから、これはおそらく中級害獣指定のケンタ
ウロスが出てきたわー」

「な、なんだってー！！蹴ってよし、走ってよし、槍使いもよしの
三冠馬クラスのケンタウロスだってー！！」

「し、しかも通常のケンタウロスではなくて、特害獣指定になる変
異種のサラブレッドケンタウロスだあー」

「みんなー逃げろー」

なんだってー！？

俺の家の畑だった場所はのどかな田舎の風景から一転。阿鼻叫喚の地獄絵図へと変わってしまった。

俺は弟らを前に走らせる。

お兄ちゃんだからな。後ろには冒険者さん達がいる。彼らから先に襲ってくれるだろう。正義感強い人はギリギリまで戦ってくれるだろうし。

そんな風に考えていた時期が私にもありました。

彼らも身体が資本なんですよ。だから我先にと逃げ出して行きました。

途中、余裕のある冒険者さんは村のチビッコを脇に抱えて逃げていくてくれたので、ありがたいです。弟らもそうです。

でも俺は駄目でした。クッソ。

後ろでは逃げ遅れた冒険者さんたちの命の炎がまた一つ消えていき、いつしか俺は最後尾、後ろにはサラブレットケンタウロスさんしかおらへんがな。

やれやれ。

俺はそう小さく呟くと、身体を反転させてサラブレットケンタウロスさんと向き合う。

「こういうのは、ガラじゃあねえんだけどな」

俺はまた小さく呟くとエアタバコをそこいらに投げ捨てた。

「いいよ」

俺は挑発する様に手招きをサラブレットケンタウロスさんにする。
しかし異種族の壁、異文化の壁、習慣の違い。それらが彼と俺との
間にあるみたいである。

サラブレットケンタウロスさんは実に冷静に俺に向かって一直線に
槍を突き出してきた。

当たらなければということはない。

けれども、逆に考えると当たれば大変な事であり、案の定、俺は彼
に突かれた。

かかった！！

俺はこのタイミングを待っていたのである。

対無力な市民に対しては百戦錬磨であろうサラブレットケンタウロ
スさんに俺がどのようにすれば勝てるか？どうすれば攻撃を当てれ
るか。

知恵を使う？チートが開眼して俺がスゲーパワーアップ？それと
もテンプレ？

正解は知恵だ。

俺の脳がフル回転して出した答えは、近距離からの目からレーザー
だ。

肉を斬らせた。後は相手の骨を断つだけ。これで勝つる。

「目からああああ、レーザーだああああー

ッ！！」

渾身の一撃はサラブレットケンタウロスさんの鬣に当たり、ちよつ
と鬣の一部分が熱で縮れた。

ここで終わりか。

俺は薄れていく意識の中、多分これが最後になるのだろうかこう思

った。

しかし、俺はテンプレ野郎。テンプレ野郎なのだ。テンプレ野郎は死なない。

（お生きなさい。私の愛しきテンプレ玩具。そして思うがままに熱くなりなさい）

槍がシュポンと抜けて、俺の身体がみるみるうちに修復されていく。

「テンプレをおお、なめるなよーっ!？」

必殺のをおお、最終氷殺旋風固め（ファイナルデスブリザードマウンテンサイクロン）だあああ」

最終氷殺旋風固めとは氷山の様にブリッジを効かせたジャーマンスープレックスである。

通常のジャーマンスープレックスよりブリッジを効かせる事により二倍の威力。

相手が人の二倍の脚を持つ四つ脚のお馬さんだからさらに二倍。

テンプレによりさらに三倍の併せて通常の十二倍に威力を高められるのが、このゆでたまご理論改。そしてそれを使用する最終氷殺旋風固めだ。このジャーマンは通常の12倍の威力のジャーマンスープレックスなのだ。

さらにこの時、先に逃げた弟らの兄の無事を祈る気持ち加味される。

一対一のシングルマッチが、ここにはいないファミリーの思いが届いた時、シングルマッチは俺と多対一となり、その時の力は1+1+2を超えて1+1+100となり、結果1+1+2の十倍にも達する小島選手理論の完成となるのだ。

このゆでたまご理論改と小島選手理論を組み合わせた時、さらにド

ンとなるのだ。

つまりは120倍。野人選手を1としたときの120倍もの威力のジャーマンスープレックスとなる。

そのジャーマンスープレックスがサラブレットケンタウロスさんに襲いかかる。

どこから腰なのかわからないのでバックから後ろ足の少し前をホルドし、闘魂だ。

550kgぐらいの巨体のサラブレットケンタウロス は地面に叩きつけられ、衝撃で砂埃がそこいらを舞った。

痙攣していたサラブレットケンタウロスは そのうち永遠に沈黙したと思われる。俺はホルドを解いて、立ち上がる。

死んでる。ならば俺の勝ちである。

サラブレットケンタウロスさんの槍は俺の血で汚れていたけれども、損傷はない。ならばこの槍を俺は拾ってポッケにナイナイしようと思う。

法律がどの様になっているのかはわからないが、これは俺の物である。今決まった。

俺は槍をたととしたが重くて持ち上がらない。

俺のテンプレは身体能力は上げ俺はてくれなかったみたいである。

残念。

残念な思いのままに、そこいらの尖った石で持ち手の部分にゲイルと名を入れておく。

効果あるかどうかはわからないが所有権は主張しておこう。

丸い持ち手に石で名前を入れる作業に悪戦苦闘していると前の方から数人冒険者風情がやってきた。

遅いと俺は思った。

「大丈夫だった……それは、レア武器の墮火馬の槍じゃあないか。

まさかサラブレットケンタ……し、死んでる」

これは墮火馬の槍というのですか。それもレア武器と。お金になりそうな予感。

使えない武器を大事に持っておいてもお腹は膨れないが、お金にしたら物買えるし、食料も買えちゃうよね。家族皆ハッピーになるよね。

なら売ろうと思って正解なんだよね。

「誰がサラブレットケンタウロスを倒したんだい」

「テンプル僧侶のＴさんが殺ってくれたんだ」

「まさか、あの伝説のＴさんがかい。良かった坊主。で、そのＴさんは」

Ｔさんは伝説の人だったのか。俺は適当に言っただけけども、寺生まれって凄い。

「帰ったよ」

「そうか。なら好都合だ。死ね」

な、なんですとー。

彼はそういうと腰に差していた剣を抜き、驚く彼の同行者をそのままに最短で俺にあっさり突き刺したのだ。

俺は都合の良いように嘘を付いていたら、好都合だ殺すと言われた。そして刺されている。

何を言っているか、恐ろしい程に理解出来てしまい、恐ろしい事の片鱗を味わっているぜ。

「俺はその墮火馬の槍、殺してでも奪いとるんだぜ」

テンプレは立て続けには起きない。

俺はあっさりと殺られた。

そして俺はまたテンプレした。

こうなると俺はテンプレの神に愛されているのではないかと錯覚さえしてしまいそうである。

そういう感覚を心の中に持ってしまうと、どこかにどうせテンプレさせてくれるだろうという安易な思い込みが産まれそうである。

そうなると、命が軽くなってしまうでしょうもなくなる。

となると、この命、次もわからぬ故により一層大事にしなければならぬと誓うのである。

殺された俺はサイドテンプレ空間に戻っていた。

神の住まうその空間は白であり、無であると哲学者は評するのであるうか。それとももっと詩的な表現を小難しくした言葉で現すのだろうか。

そんなことは俺にはわからないけれども、哲学者が来たことも有るのかわからない空間に少なくとも一度来ていて、これが少なくとも二度目なのは確かである。

「おお、我が愛しのテンプレ玩具よ。殺されてしまうとはなさない
い」

元々の俺は残念な事に低スペックだ。だからしょうがないだろう。と開き直りたい気持ちもあるが、そんな事を神に言ったらますます失望されるだけであろう。

俺はせめて反省してますよとでも言う様に申し訳なさそうな顔を作るだけにしておいた。

俺が反省する要素は何一つない。

「さあ、もう一度立ち上がるのですよ。テンプレを施しますが、希望を言いなさい」

「でしたら竜になりたいです。西洋の翼竜です。白く、高貴で、生物の頂点である。そんな翼竜でテンプレしたいと思っています」

「翼竜とな。ふむ。翼竜ですか。少々難しいですが出来る限り頑張ってみましょう」

「ありがとうございます」

これで敵は少ないな。引き込もって、敵対行動しなければ人間も早々と駆除に来はしないだろう。

流石俺。頭がいいんじゃないかな。

俺は多分真っ白だった翼竜になった。

なんで不確定な言い方かというと、俺は翼竜のゾンビに憑依したからだ。

その憑依した翼竜さんの記憶には、ダンジョンを住みかにしてうん百年。

快適に引き込もっていたらハーレムパーティーが突如やってきて、そしてそのハーレムご一行に駆除された。

その時の無念さが残留し、生前の翼竜さんの圧倒的魔力と結合した結果、ドラゴンゾンビになった、と。

そして、その魔力も尽きて空っぽになって後は朽ち果てるだけの所

に、これは好都合と俺が憑依させられたわけだ。

なんで翼竜がダンジョンという土穴の中で引き込もっているのー、という突っ込みはさておいて、我輩はドラゴンゾンビである。

母親も知らなければ父も知らぬ身である。

幼いも更けているも関係なく産まれた頃より腐敗が進んでおり、そのため腐敗した片翼がちよくちよくズレるのだが、その度に翼を直さなければならぬ。

その手間はたいした事はない。けれども回数が増えとなるとそれは大変面倒な事である。

どうせ飛べぬからと取り外す事も出来なくはないが、我輩は腐っているとはいえ翼竜なのだ。

我輩の翼竜としてのプライドがそれを許してはくれぬのだ。

飛ばない豚がただの豚であるのと同じく、翼のない翼竜はただの竜なのだ。

となると、我輩のアイデンティティにも少々のアレとなる。

翼竜が翼竜たる由縁は翼があり、大空を我が物顔で飛び回る事なのだから。

腐って飛べない翼を大事にしてどうするのかと聞かれても、どうもしない。けれどもこれだけは譲れない線なのだ。

巢のはじつこにあるヘドロの池に浸かり、そこから首だけを出して寢床を見る。

地面に俺の一部がボタボタと垂れていて、異臭を放っている。臭い。臭いのだけでも、この臭いが何故かとても好ましい。

本能が好んでいてしょうがない。例えて言うならば腐っても自分の身体。例えになっっていないが、そういう表現って、素敵やん。

俺は誰も見ることもないドヤ顔を試みた。とても寂しい気持ちになった。

家族は元気だろうか。会いたいね。会いたい。

赤毛の妹に会いたい。母親譲りの顔で美人でもカワイくもないけれども、明るい妹に会いたい。妹妹妹クンカクンカしたいお。妹を肩車して思いつきクンカクンカしたいお。

妹の太股ハアハア。太股ハアハア太股やつこいよ太股。妹たんおにいたんだよ妹たん。

太股からクンカクンカ、スーハースーハー。グッドスメルだね妹たん。

とりあえず妹に届け、どっかにいるだろう妹に届け俺の気持ち。

そうだ。外に行こう。

なぜ俺は今まで外に行こうと思わなかったのでしょうか。

外には妹はいないかもしれない。世界が違ったり、時代が違つかもしれないから家族だった人たちとは出会えないかもしれない。

けれどもロリでボーイッシュで照れ屋なボクっ娘とは出会えるかもしれないんだね。やったね。

となるとこんな所に俺はいられないよ。

ヘドロの池の中から思いつき立ち上がる。と、片翼がついにもげたが気にしない。なぜならボクっ娘が待っているからだ。カワイイはジャステイス。

俺ははじめての外出をする事に決めた。

暗い洞窟内もドラゴンゾンビアイで完璧だぜ。視界は濁っているけどな。

ノッシノッシ歩く。ボッタボタ垂れる。

ノッシノッシ。ボトボト。ヌチャア。

コウモリも一角兎もスライムもそのけそのけ。ドラゴン様のお通りだ。

異臭を放つ俺から逃げる様に武装した小鬼や子犬人、狼や一角兎がどんどん逃げていく。

臭い イズ ジャステイス。悪臭は正義です。

俺のデンジャラスフレバーが魔除けとなり、ロリボーイシユはおろかガチムチ戦士や冒険者一行ともエンカウントすることなく、俺は出入り口の一つであろう外が見える出入り口付近へと着いた。で、外へと出た。

そこは畑のど真ん中だった。

辺りを見回すと鼻を押さえている武装した人や農民にちびっこの姿が見える。

見覚えがあります。どうみても俺がいた集落です。ありがとうございました。

そして、時代も世界もあまり変わっていないのか、俺が知っているままの弟らと知り合いが鼻をおさえていたのが見える。

お兄ちゃんだよ、と言いたい気持ちはあるにはあるが、今の俺は間違ひなくドラゴンゾンビで、説得力は皆無である。元々声帯ないのでけれどもね。

まあ、これを見るに俺は駆除されるのじゃあないかな。歓迎されないよね。常識で考えて。

「くっせー。まじクッセーよ。汚いし、臭いし、モンスターだし、マジヤベエよ」

「んだんだ」

「あぁん！！ 鼻が曲がるってレベルじゃあねーぞ」

「臭いね」

「うん。臭いね」

ですよね。

近くにいた冒険者は突如表れたモンスター俺を確認すると武具を構える。

農民は子供らと共に集落の方へと走って逃げていく。

そら、ドラゴンゾンビなんだからそうなるわな。

そして近くにいた戦士が斧で斬りかかってきた。

油断していた俺のアバラ骨あたりが数本持っていかれ、地面へと落ち、土に刺さる。

痛覚はない。だからまだ大丈夫。

戦う技術はない。勝てる要素もまたない。成長していないと言えばその通りであり、言い訳をすればまだドラゴンゾンビとしての環境になれていなかっただけであり、ドラゴンゾンビの戦い方を知らないのだからしょうがないのだ。

俺が無駄に考えている間にも戦士は次々に俺の身体を攻め立てる。

骨は折られ、尾は切り取られた。

さらに身体は時間と共にボタボタ落下している。いまでも垂れていつているのだ。

俺は観念した。

そもそもムリゲーだったのだと諦め、次のテンプレがあれば良いなと思った。

命は大事だと思っていた俺はあっさりと諦めた。

俺が最後に見たのは見覚えのある槍の先端だった。眼から侵入を許し、激痛と共に、脳内で槍がグリングリン

とかきまわされる感触。痛覚があるところにはまだあるのですね。

俺はまた死んだ。

これは俺のテンプレの話である。

今日という概念の基準を何処に置くかという点で悩ましいけれども、俺は今日テンプレした。

死んで、元の俺の世界での月日の流れと、時間という物のない世界を経ての、テンプレ世界への移動を一日としてカウントしても良い物なのかどうかは、多分違うのだろうけれども、無学のヒッキーの俺にそこまで求めてもしょうがないのである。

大事なものは主観であろう。俺が一日の中での流れだと思えば、例えばそれが結構な日や年月を過ぎていても、体感してないのであれば俺が一日だと思えば一日なのだ。思いは力。

さてはて、テンプレである。

貰ったチートは圧倒的治癒力と、食事を取らなくても問題ない能力である。

これでこっちでも働かなくて万々歳である。

いくら肉体強化して貰おうが、腹が減っていて、頭痛、腹痛、神経痛とか病気のオンパレードの状態で万全の戦いが出来るかと言えば、出来ないだろう。

そも、こういうのに正解なんてない。必要なものは無数。選択出来る数は極めて少数。

自分にあった能力をチョイスすれば良いんだろう。

知力メガネモヤシ君が武器の扱いに圧倒的優れている能力一つ貰っただけでは、満足に武器も持てず、持てる様に、振り回せる様になるまでは時間がそれなりに必要で、結果遠回りになるだけだ。言いたいことは適材適所だということ。

それが俺はこの能力だという話だ。
満足に人とコミュニケーションを取る事が出来ない、不器用過ぎて満足に武器も扱えない、頭も学も酷いし、農業もまるつきりわからない。生活も頼りつきりだった俺がテンプレ世界で何が出来ようか何も出来はしない。

何も出来ない俺が何処のコミュニティで受け入れてもらえるというのか。

俺は長考した。それがいけなかった。

テンプレしたての俺が現状認識の作業をしていたら、その俺に後頭部に衝撃を受け、俺は気を失った。

「ひゃっはー男ゲットだぜー」

何がいけなかったのだろうか。

あの見晴らしの良い平野で長々と立っていたのがいけなかったのであらうか。

気がついたら簀巻きにされた状態で屈強なお姉さんたちにワッシュイワッシュイオイされていたんだ。

俺は捕まった。アマゾネスさんの種付けマシンとして捕獲された。遠征帰りの出稼ぎアマゾネスさんが道中ボーツとつたっていた俺を見付けて、お土産の追加に丁度良いんじゃないかね？と捕獲したらしい。

こういうのは屈強な男が種付けマシンとして導入されるのかと思っていたけれども、マシンの納入が遅れ気味で、ラインの稼働が満足に行っていないので、ちょっと性能は落ちるけれどもしょうが

ないし、これでいいや、となったらしい。若そうだしという事で。

四畳くらいのスペースの独房に俺はいまいる。

向かいにはやつれたおっさんが布にくるまって寝ている。

外からは賑やかな声が聞こえる。遠征成功の宴なのだろうか。肉の焼ける美味しい匂いと賑やかで、とても楽しそうな音が、このアンモニア臭いこの独房に俺は一人で不安と寂しくなった。

ヒッキーはヒッキーなのに寂しがりやという面倒くさい生き物なのである。

その晩。

宴も一段落着いたのか、本日のメインイベントが開始された。メイニンベントーは勿論俺。

前座で、先に出されていた前の独房のおっさんとすれちがった時、彼らの俺を見る目がとても同情的だったのが印象に残っている。

宴の余韻の熱気が依然残る、ここアマゾネス集落ではピンクの熱気が俄然強くなっております。

女人の男子禁制のこの集落に捕獲された俺はさながらライオンの檻に放り込まれた兎なのか。

捕食されるのを待つしかないのか。いいや、違う。ウサギにも武器はある。兎にもプライドはある。兎は兎の皮を被った百獣の王ライオンなのか。

特別ハンディキャップマッチ、百人あまりのアマゾネス対俺の、ゴングの鐘の音が、ここ宴の席で鳴らされようとしております。

俺は大人の階段を昇った。弾道はすでにmaxだ。

ラインはフル稼働した。

圧倒的治癒能力もフル稼働した俺は種付けマシンとして、満足の行く結果を見せと思う。これは客観的にみても、そういう結果である事は間違いない。俺は東洋の種付け男と自称しても問題はないと思う。

そして、工場長は言った。

「ま、マジパネエなんだからね」

俺は勝ったと思った。

勝ち負けではないが、勝ちである。種付け出来たかどうかは定かではないが、種付けしたという事ならし、俺は干からびていないので勝ちだ。

昨日は気持ち入っている筋肉と野菜の素材をいかしたスープだけだったのが、朝は昨日の宴の残りと思える冷めた焼いた肉が付いている事からも満足してくれたのだと思う。

前のおっさんは肉と野菜のスープだけという事からそうだと推測される。

おっさんの俺を見る目もスゲエマジパネエという視線だ。俺はちょっと照れた。

この肉は初めて労働の対価として頂けた物である。かーちゃんがいたら褒めてくれただろう。それとも「ふん、それぐらいで何よ。あんたの歳だったら、それは当たり前前の事なんだからね。一回だけの事でそんなにはしゃいでバカみたい。いい、私は当たり前前の事で褒めるなんてしないわよ。でも、ちよつとは見直してあげてもいいかな。ちよつとよ、ちよつとだけなんだからね」とでも言うのだろうか。

まあ、かーちゃんは俺を産んですぐに男と逃げたから俺はかーちゃん知らないだけだね。

脳内かーちゃん、マジツンデレ。

寂しくなったので俺は朝食をさつさと食べた。

半年後。

俺は追い出された。

「もう用は済んだ。男はしばらくイラネ」

合法ロリボーイッシュでボクっ娘のアマゾネスのアオイちゃんが俺に着いてきてくれた。

「君をほつとけないよ」

別にほつといてくれとも何とも言っていないけれども、助けてくれるというのであれば有難いという気持ちはあり、素直な気持ちで助けてもらおうと思う。

さらに半年後。どっかの小さな村に厄介になれた俺らは小さな家を借りて生活をしていた。

アオイちゃんが獲物を狩ってくる。

俺がそれを調理したり、加工して売って銭を頂くというライフの中で、アオイちゃんの腹がおっきたお。

孕んでいた。そらそうよ。

まいったという気持ちがかかなり大きい。

こうい言ういはしくはないけれども、あえてすると、収入源が絶たれた。

身重の彼女に狩りに出では欲しくないというのが正直な気持ちであ

る。

俺自身は食わなくてもいいし、病気の心配もない。

食わなくてもいいが、アオイちゃんが「しっかり食べなきゃダメだよ。それにボクだけが食べても、君と一緒にじゃなきゃあ美味しくないんだから。ほら、一緒に食べよ」と言うのだからしょうがない。そう言われると食べなくてはならないのだ。

とうとう男の俺がアオイちゃんに男の甲斐性を見せる時が来たかと張り切って見たものの、ノーワークです。労働する以前に労働する場所がないです。

嫁というか、結婚していないけれども嫁の為に一番近くの比較的大きな街まで出稼ぎに行ってみた。

その街には不思議なダンジョンがあり、人の賑わいは良く、なんとか稼げそうな気がした。

稼げた。俺は何も一攫千金を狙っていたわけじゃあない。産婆にきてもらう金と当面の生活費があればいい。

俺はダンジョン内に落ちている石ころを遠くからスライムに投げつける作業を延々と進め、小銭とドロップアイテムを稼ぎ、金を貯めた。

「おつ、スライムキラー7098号やってるな」

「あつ、全てを燃やしつくす紅蓮の魔法戦士キースさんチイス。これから探索っすか」

「おうよ。モリモリ潜るんだぜ」

「気をつけてくっさいねー」

「あんがとよ」

全てを燃やしつくす紅蓮の魔法戦士キースさんは手を振りながら奥へと進んでいった。

「種付けマシン7098号、まだあんたこんな所にいるの？ 本当、クズね。」

「ふひひ、鋼鉄の処女戦士カーリーさんじゃあないっすか。またお漏らしさせて欲しいんすか？ マンツーマンでじっくりお相手してあげやすぜ」

鋼鉄の処女戦士カーリーさんはアマゾネス集落で知り合った女戦士さんだ。遠征組みとは別にダンジョンに潜るアマゾネスさん。種付けマシン7098号とは俺の事である。

女性だけの集落から正式にアマゾネスの集落と決めてから七十年。九の月に捕獲した八番目の男だから7098号。

名無しの権兵衛だった俺は彼女が俺の事を7098号7098号と呼ぶので、いつしか俺は7098号として周りから呼ばれるようになったしまった。

スライムキラーはあれだ。ただの称号。いつ見てもスライムばっかし相手にしていたからスライムキラー。

「っ！ 斬るわよ」

「おお、恐い。近々子供出来るんで、勘弁してくださいよ」

キツと強く睨んでくるが、正直恐くはない。だって、ねえ。

「……だったわね。じゃ、精々頑張りなさい。アオイを泣かしたら、死ぬわよ」

そう言うとかーリーさんも奥へと向かって行った。

なので俺はスライムに石を投げる作業を再開した。

疲れないのと食費がいらないし、一階付近だから敵も強烈ではないから軽度の怪我も圧倒的治癒力ですぐ回復する。

まさに転職とも言うべき職だ。汗を流すって素晴らしい。いまなら七色の変化球投手にもなれそうな気がする。

とりあえず半年は何とか生活出来そうならいは貯まったので、お土産を買って帰ったら、アオイちゃんと村長のイケメン息子がパコパコしていた。

違うの違うのとか言っていたけれども、俺は違わないと思う。何が違うのかわからないし、事実違わない。

これはどういうことなのかと考えてみたら、簡単な話である。

そもそも彼女と俺は恋人でも嫁でもなんでもない同居人もしくはルームシェアをしていただけである。

だから彼女がどうしていようが、俺の口出しすることでは無いのかもしれない。

そんな時、カーリーさんが鬼の形相で細身の剣をこちら、俺に向けて刺し殺そうとしている場面が幻視された。

アオイを泣かしたら、殺すって言ったわよね。

「違うんです。これは違うんです」

だからカーリーさん止めてください。

俺のあんまりなりアル未来予想図では殺される予定である。

「そうなの、違うのお」

何を勘違いしたかビッチさん驚愕の勘違いである。黙れビッチ。テメーにいったんじゃねえよビッチ。そのテメーの臭い口を閉じろや。

「違うないだろ。常識で考えて」

「貴方がアオイさんを悲しませるからいけないんですよ。反省しなさい」

「……待とう。皆、落ち着こう。冷静になろうぜ、イケメンくん、ビッチ」

「……」

「……」

ふう。

クールダウンだ。俺。クールになれ。

「よし、夜も遅い。とりあえず先延ばしだ。明日話し合いをしよう。あとイケメンくん。時間も時間だ。泊まって行きなさい。俺はどうか他の所に厄介になるから。いいね。ダメだと言ってもダメだよ」

「……はい」

「じゃあの」

俺はそう言って借家を後にした。

その足でイケメンくんの婚約者のそこそお金持ちで、病気がちのお嬢様の寝室にスネークした俺は、寝ていた彼女に種付マシーン7098号としての真価を思いう存分発揮した。そして朝も明けきらぬ内に俺は村を後にした。もう帰ってはこないと決めて。

二人がいるであろう、俺とビッチで借りていた家に俺は火を付けて行こうかと思っただけども、それは大家さんに迷惑がかかるし、悪いので止めておいた。

7098号こと俺はダンジョンに帰ってきた。

お金もあるし、石を投げてばっかいたから筋力も上がったよねと思つて、銅の剣を購入しようと、ダンジョン近くの雑貨屋で試し振りさせてもらったのだけれども、俺では持ち上げるだけで精一杯だった。

ヒッキーなめんなよ。

やっぱ、あれだよな。今流行りは投げナイフだよな。

俺は投げナイフ数本と投げナイフ入れベルトも買った。

新しい装備に嬉々とはしゃぐ子供の様な気持ちでダンジョンにいった。

スライムだ。やった。投げナイフの餌食にしてやる。

俺は投げたね。思いつきり。でも、刺さると言うより、当たっただった。どうみても真っ直ぐ刺さらず、向かわずで、持ち手の所が空中でグルンとなって、ゴツって感じ。

これは違う。これは違うよね。思い通りに何時も何時でもうまくいくとは限らないし、そりゃあ何の練習もしていない人間が投げナイフなんていきなり投げた所で、こうなるわな。

致命傷に至らなかったのか、投げた投げナイフはスライムに溶かされてしまつて使い物にならなくなっていた。

石が良いよね。使いなれたのが良いよね。

俺はそれからまたスライム相手に延々と石を投げる作業を始めた。

「ふう。俺の袋もパンパンなんだぜ」

スライムちゃんがドロップした草を袋に入れようとした所で俺の袋

がスライムからドロップしたアイテムで一杯になっていたのに気がついた。

しょうがないので俺は草をマルマルモリモリ食べた。
青臭かった。

「おい、7098号。お前帰ったんじゃないのか」

茎の部分を口に入れようとしたら、後ろからあまり会いたくない人の声が。

「……さ、さあ。俺は7098号なんて人じゃあないから、わかりませんねえ。人違いはよしてくださいよ」

「……今日は何時に増してつまらない冗談だな。私がお前を間違える筈がないだろう。はーん、さてはお前、アオイと喧嘩したな」

あれはお前の大好きな冗談だ。本気な筈がないだろう。

そういつてカーリーさんは俺の背中をバシバシ叩く。

口の中に青臭さが逆流してくるし、背中痛いしで、俺涙目。

「なににせよ私の妹を孕ませたのもけしからんし、それを放って家出なんて、もっとけしからんな。帰れよ」

「違うんです」

「はあ？何が？何を言っているんだ」

「喧嘩じゃなくて、違うんです」

「殺すって言ったのは、半分冗談みたいな物だし、私は事情も知ら

ないで一方的に責めはしないって」

「だから、違うんです」

「よし。表へ出る」

「な、なんと」

俺はあの後、カーリーさんにされるがままにダンジョンの外へ連れ出され、そのまま探索者の酒場へと連れ込まれ、尋問された。気の抜けた麦酒の様な物とツマミをいただきながらの尋問である。

村に帰ったらイケメンとパコパコしていた。

だからダンジョンに帰ってきた。

俺がそう言った時のカーリーさんの顔は複雑そうだったよ。

「ひどいっすよね、ほんと」

「まあ、うん。そうだな」

カーリーさんは難しい顔をして酒を口に運んだ。

「そういや、カーリーさんも妊娠していてもおかしくないんじゃないかな
いっすか」

「ん？……おっ？おお！！　そうだったのかっ！！」

えっ！？

「通りで腹の周りがおかしい筈だ。そうか、これが孕んだという事なのか」

そう言うのでカーリーさんのお腹周りを見ると、確かに膨らんでいた。というか、周りの人も気付いてあげなよ。

母体に何かあったらどうすんのさ。こういう人たちが電車のマタニティマーク無視すんだよね。俺もそうだけど。というか、電車なんてそうそう乗らなかったけれどもね。

「カーリーさん、結婚しよう」

「冗談は顔だけにしてくれ」

ダメだった。

「なんで」

「なんでも何も、タイプじゃない。悪友としてなら悪くはないが、友達以上親友未満？それ系で」

恋人未満ではなく、親友未満というものも、また微妙な評価であると同時に、まあ、そういう評価されるのも、自分の言動を省みてみると、そらそうなるわな。そうなると、あれだ。

「代金、ここに置いておきますね。お大事に」

「うん、またね」

俺は切なくなつたので宿に帰って寝た。

次の日、カーリーさんとダンジョンで出会った。

「来週から里帰りするんで、元気でな」

そういつてカーリーさんはあの青臭い薬草を二束俺に向かって放り投げてきたので慌ててキャッチする。

キャッチした俺はこの青臭さがとても大っ嫌いだったので、げんなりした。

カーリーさんの用はそれだけだったのかクルリと振り返り、ダンジョンの出入口へと帰っていった。

俺はそのカーリーさんの背中に向かって大きく手を振りながら、

「カーリーさん、俺との元気な子供を産んでくれよー」

と、叫んだら、カーリーさんは振り返らぬまま片手を上げ、握り拳をつくった。

カーリーさんがとても美しくみえた。

まあ、俺の子供だと限った話じゃあないかもしれないけど。おっさんの子供かもしれないし。

それはともかくとして、俺は見えなくなるまでカーリーさんに手を大きく振って見送った。

青臭い薬草が何だか好きになれそうな気分になったと思い、一口齧ってみたけれども、やっぱり勘違いで、大嫌いな青臭いままだった。

「神殿っすか」

「知らねえのか」

神殿という意味の正確な定義を無学の俺は知らないし、こちらの神殿とあちらの神殿の定義が果たして同一の物かは恥ずかしながらわからないが、なんとなく漠然と想像は出来る。

洋風神社。

やっていることは結局似たり寄ったりなのであろう。

「あれですよ。神官がいて、巫女がいて、神を敬っている所っすよね」

「間違っちゃいねーが、正解じゃねーよ。あれだ。レベルアップ場所」

「レベルアップというのは、強くなるって事ですか」

「まあ、そうだ。スライムなんてたかが知れてるが、お前さん程も狩れば一か二ぐらいはアップしてんだろ。知らねーみたいなんで一度教えてやるうかという話になっただけ」

「……ありがとうございす。まあ、近々行って見ようかと」

「いとけいとけ」

行くと言っているのにいとけなんて言うのもどうかと俺は思ったが、先輩探求者にキレられると、俺なんて指先一つでダウンなので黙っておく事にしたのだが、レベルアップとはまたこれ如何に。レベルアップか。レベルアップするとどうなるのか？

ゴリマッチョになれるかな？なれるよね。ワクワクするよね。
マッチョになったら、こー、二足歩行の犬人間みたいなコボルトさんにボマイエするの。

あと、スライムさんにセントーンとかもロマンあるよね。背中がヤバイ事になりそうだけれども。
あたし、モンスターにプロレス技かけるのが夢だったんだ。

数日後。

俺は精神的に疲れたので、ダンジョンから帰って、神殿に行ってみたけれどもお布施が必要だと言われたので、無駄金使いたくない貧乏厨の俺はダンジョンに帰った。
課金厨は氏ね。

石を投げるの楽しいお。

さつき、脇を女の子と男の子の混成パーティーがキヤツキヤツしながら通りすぎていった。

ウツウツ、羨ましくなんかないんだからね。

あー、空から女の子降ってこないかな？

ロリでボーイッシュでボクっ娘でビッチじゃない女の子とか。

あーあ、アオイちゃんがビッチじゃなければ良かったのに。

この時、男の考えはまさに二次元厨と同一ッ！！
それに男は気がつかない。

彼女でも夫婦でもない女がパコパコしているからといって、それ即ちビッチというのは圧倒的決めつけッ！！潔癖厨だッ！！

いうなればこの男、二次元厨という泥沼に下半身が埋まっている状態ッ！！

あとはズブズフと落ちていくだけ。

「あ、スライムキラー7098号さんおつかれーっす」

「お、白銀のアイスブリザードボボさんちいーす。これからっすか」

後ろにはこれから潜るであろう銀髪刈り上げメガネ魔法使いあんちゃん
のボボさんが爽やかな笑顔で立っていた。

「おうよ。これから38階目指してレッツラゴーよ」

「すげー、ボボさんスッゲー」

「よせやい照れるじゃあねえか」

「あれ、38階っすか？無理だっけ話じゃあないんすか」

この洞窟は不思議なダンジョンなんでも不思議であり、不思議だから現在は28階までしか確認されていないという話である。
探索者の習性として、落ちている金目の物は全て拾ってしまいたい
というのがある。

で、27階には高値で取引されている箱があり、それを拾うと下る
事が何故か出来なくなってしまうのだ。

27階まで行くとだいたいお腹も空くし、疲れたから帰ろうかとなる。

落とし穴に落ちて28階までたどり着いた人もいるらしいから、まだ
まだ下の階層はあるのだろうが、そこは未知の世界なのだ。

それをボボさんははつきりと38階と言った。言ったからには27
階トラップをどうにかする手段が見つかったのだろうか。

「お、おお。あれ、7098号さん知らない？突破方法見つかったんすよ」

「ヒッキーっすから」

「んだよな。あれだよ。箱無視して降りれば上りにならねーって話っすよ」

「なんという発想」

「スッゲーよな目から鱗がドロップしたよ」

「気を付けてくっさいね」

「おー、お前もな。じゃあの」

ボボさんはそういつて奥へと向かっていった。

地下かあ。うーん、いいなあ。

なんていうか、こう、胸がドキドキするよね。

未知へのアドベンチャー。命をかけた探索とロマン。そして財宝。

うーん、こー、なーんで俺はこーんなチートにしちゃったのかなー！

なーんで俺は引き込もっていいのかなー。予定変わりすぎっしょ。

いいなー、俺も行ってみつかない。ちよっと冒険してみつかない。

楽しそうだよなー。っーか、楽しいのだろうなー。楽しいよね。きつと。

うーん。うーん。良いかな。行っても良いよね。行こう。そうしよう。

俺は入り口付近の狩りを切り上げ、階段探索することにした。

暗い。圧倒的暗さ。

当然だ。この洞窟形ダンジョンには奥にまで日の光は通らない。少し考えれば辿り着く当然の事。迂闊にも7098号は失念していた。当然、準備を怠った者には地下への入り口はあらわれない。

この時、7098号地下への入り口を見逃す。階段見落とし、まさかのスルー。すぐ脇を通る致命的ミスっ！！

そして7098号帰還。探索中止する。

が、良かったのかもしれない。

7098号は弱者。そしてここはダンジョン。見方を変えれば準備期間を得たのだ。次に繋がる時間、猶予を7098号はどうであれ、得た。

俺は中古のカンテラと油を買った。防具も革のベストに中古とはいえ新調し、初めての武器竹の槍を持って洞窟へと向かった。

新品でないから損傷がちらほらあるけれども、使い込まれ柔らかくなっており、使いやすくなっているのがさりげなく嬉しい。

オニユーのが欲しかったと聞かれたら、それはオニユーの方が欲しいに決まっている。

だけでも俺は弱い。圧倒的に弱い弱者であり、なにより予算の都合もある。

戦士の身体の動かし方なんて一日二日で出来るものではないのだ。それが新品のバリバリの革製品を身に付けて戦えといわれても、無理に決まっている。

一流の戦士でも新しい武具に馴染むまでは若干の戦力ダウンはしてしまうというのにだ。

それが素人さんならなおさらだ。

防波堤でレジャー魚釣りを楽しむ人にいきなり漁船に乗ってマグロを釣ってきてくれなんて言っても難しいのと同じだ。装備が違う。相手が違う。

本気であろうと、レジャーであろうと、なめてかかったら俺はダンジョンに殺される。

武器の方は不安がないと言えば、やっぱり嘘だ。

安価な竹の槍なんて子供の訓練道具でしかない。腐っても害獣、それも相手のホームで戦うには頼りが無さすぎる。

これ一本しかない。折れたらどうする。通用しなかったらどうする。それが敵に囲まれた状況だったら。逃げ切れない状況だったら。

そんな事を一々考えていたらきりがない。

しょうがないと納得した事だ。

なにせ、俺にはこれしか持てなかったのだから。

俺は防具や道具を買って、素泊まり宿に帰ろうとした時、武器屋を見つけてしまった。

そういえば、武器も用意しておかないといけなかったという事を思い出した俺は武器屋に寄っていったんだ。

高そうな魔法武具からただの刃物まで幅広い品揃えに俺は心が踊った。

剣、ハルバート、アックス、槍、杖、ハサミ、包丁、ナイフ。

前回、手投げナイフを買った雑貨屋とは段違いの品揃えだった。流石専門店。

流石専門店。高い。お値段が高い。流石専門店。

俺は飾られている武具は眺めるだけにして、ワゴンセールの様に雑多に積まれた武具コーナーから何か素敵な物はないかとチョイスする事にしたんだ。

悪くはないと思ったのは予算の関係で無理だった。

じゃあ、予算で買えそうなのから使えそうなのという事で色々チョイスした。そして、チョイスしたのを一言店員にことわってから振り回させてもらった。

疲れた。武具重い。流石武器である。洗練されていないとは言えども、一振り二振りで息があがってしまう。

これには流石の店員も苦笑い。

消沈して店を出る俺の視界にそれが入ってきた。

店舗に立て掛けられている竹の槍。その内の一本を俺は手に取り、フーリングを確かめる。

これは、まるで、俺の為に作られたかのようなフィット感。

これだ。俺の武器はこれである。俺はその竹の槍を持ち、店舗に戻ったのだ。

「親父、これをくれ」

「ブフツ、あ、ああ、持ってけ」

親父が啞えていたパイプに息が逆流し、灰が空に舞い上がる。

「幾らだ」

「た、タダだよ。そんなもん子供の遊び道具だからな」

タダですと。

「そうか、頂いていくぞ。センキューな」

「あいよ」

俺はホクホク顔で宿に戻った。

前回、地下に行こうと決めた事から薬草を換金してないので薬草は問題ない。

もしかしたらあまりの低スペックで、一撃必殺される俺かもしれないし、そうでもないかと思われるから、階層の浅い所のドロップ薬草とはいえどもあれば嬉しいよね。使わなければ使わないでおよし。

俺は翌日、初めてのダンジョン探索に赴いたのだ。

明るいつて素晴らしいね。

俺は石ではなくて、竹の槍でスライムと戦いながら先に進んだ。

竹の槍の先端が早くも丸くなつてきているのが気になる。

スライムの酸性ボディと木製武器は相性が悪いのかもしれない。

少し、慣れてきているので、通常通り、遠距離からの投石でスライムハンティングに切り替えた。

俺が何故、スライムキラーなのか、それを皆さんに教えよう。

俺はスライムだけにたいして圧倒的に強い。

スライムの天敵は人種ではなくて、この俺なのだ。

遠方より投げられし石は必殺の石。一撃必殺なんだぜ。

爆散されるスライムさん。カラフルな汚い花火なんだぜ。

俺は石を手で遊びながら進んでいると、銀色の光沢あるスライムさんと遭遇した。

それは初めてみる色だった。とりあえず俺は何時ものように石をスライムさんに投げた。まっすぐストレートで。

パワプロで言うところのビ4 重い球 低め 回復 の能力のある俺のストレート158? は真っ直ぐスライムさんへと向かい、当たり、それが俺に減速する事もなく真っ直ぐはねかえってきた。

「あがつ!!」

腹に当たった石は革のベストにめり込んでいた。

骨も何本かイカれたかもしれない。

治癒力でなんとか回復したけれども痛みはまだ感じる。

なんだよ、こいつ。こえーよ。何なんだよ。

俺は恐怖した。

初めての経験である。スライムに対して圧倒的強者であった自分。

その弱者の思いもしない反撃。それはスライムキラーである俺への一撃。それは確かに届いた。

疑問、恐れ、違和感。

ゆつくりとこつちへ這いずってくる光沢スライムは王者の風格さえもあつた。

もしかして、ここいらのスライムの主なのかもしれない。

弱者であるスライムの王と馬鹿にするのは簡単だけれども、スライムとはいえ、王には違いなかったのだ。

ならばなめてかかれば、俺はここで命を落とす。いや、違う。何処でも何時でも命を落とす機会はあつた筈だ。

アマゾネス村の時も、お世話になっていた村でも、ダンジョンでも何時でもタイミングさえあれば俺は殺されていた。偶然、運が良かっただけだつた。

甘えが出来ていた。慢心していた。俺は今も昔も弱者だ。勘違いはいけない。

見せてやる弱者の闘いを。

俺は後ろへ全力で逃げた。

勝てないなら逃げよう。

勝てないものは勝てないのだから。

俺は主人公でもヒーローでもなんでもないただのヒッキーだから、そういうのはそういう人に任せる。

逃げれるのに逃げない弱者はただの弱者

逃げれる時に逃げる弱者は良く訓練された弱者

本当、弱者は大変だぜ

俺は常に後者でありたい。

俺はダンジョンを脱け出した。

そして目の前には地獄絵図が広がっていた。

「ワレワレ ハ ウチュウジン ダ。オロカナ ブンメイ シンリ
ヤク スル」

な、なんて事だ。

見事なまでに宇宙船という宇宙船が大気圏内で飛び回り、カラフルなレーザーかビームみたいなのが下方に向かってビュンビュンしてやがるだっ！！

「おかーさん」

「酸だぁー」

な、なんて事だ。街が、崩壊していく。

俺はダンジョンの出入り口で何も出来なかった。

そして俺は溶けた。

「ここは？」

俺は真つ白な医務室みたいな所のベッドで起きた。

確か、流れビームかレーザーみたいなので蒸発した筈。

尿意を感じた俺は立ち上がり、トイレットヘレッツラゴーしようとした。

でも尿意は吹き飛んだ。

俺の腕がえらくメカニカルになっていた。

おかしい。おかしくはない。

俺の腕は脂肪でコーティングされた毛むくじらだったはず。

こんなにメカメカした腕ではなかった。

俺が来ていた浴衣みたいな医療着というのか、それのはだけている部分から見える俺の身体は腕と同じくメカメカしていて、ロボロボ

していた。

鏡はないのか、鏡は。

無かった。俺のあるのかどうかもわからない涙腺が緩んだ気がする。
あと尿ダムは崩壊した。ウツウ。

「ごきげんよ、クツサ」

俺が失意で顔をエア涙で。

下半身と床をリアル尿で汚していると、メガネをかけたキツそうなお姉さんが俺のいる部屋に入ってきた。

「う、ごう、ごきげんようですお姉様」

「トイレはあつちよ」

お姉さんはそういつて隅のドアの付いた場所を指差す。

「もう大丈夫ですお姉様」

「スールの誓いなんてした覚えはないのだけれどもね」

「スールの誓い？」

「貴方もテンプレなんですよ。私もよ」

お姉さんはメガネを指でクイツとあげる。

俺はそれを見て、美しいと思い、発情してしまった。

そして俺の身体は爆散した。

俺はまた同じ所で目を覚ました。アンモニア臭がほのかにするので間違いない。

「はい、おはようさん」

「おはようサンクロレラ」

「ところで、さっきおいらっちの身体爆発しなかったかい」

「したよ。すっごいしたよ」

「なんでだい」

俺は首をかしげた。

なんで俺の身体が爆発するような身体になっているのかな？

「私に性的興奮すると爆発するのよ」

「へー」

どうやら俺は彼女に性的興奮すると爆発するらしい。知らなかったねー。

ふむ。ためしてガッテン。エレクチオンさせてみつか。

おっぱいは……ダメだ。太股は……残念っ！！俺は太股に魅力を感じれるレベルじゃないっ！！顔は……クールOK！！よし、パパ興奮しちゃ……が、無理。興奮せず。まさかの、ノー興奮。これには俺もビックリ。

「流石にボンボン爆発されたらマイツチングだからリミッターつけたよ。やったね」

ふーん。そうなんだー。残念

「ところでどうしてこうなったの」

「それはね」

宇宙人マジパネエから私のチートでチート召喚したら死にかけのあんたが来た。

しょうがないのでチート使ったけど、身体がどうしようもないのでチート使ってこうなった。

私に盛られてもチョー迷惑だし、腹立つからピンクセンサー付けて、引っ掛かったら爆発するようにしたら、それが作動した。付けてて良かったピンクセンサー。

「というわけよ」

それはご苦勞な事であると俺は思った。

「所で貴方。私は貴方の名前も知らないのだけれども名前は？」

「俺っすか？俺は鈴木太郎っす」

「ふーん。で、こっちでの名前は」

こっちでの名前？そういえば気にした事は無かったね。気がつけば7098号だったり種付けマシンだったり、スライムキラーでしたからね。

別に不便しなかったし。

「7098号ですかね」

「えっ？7098号？貴方があの7098号」

7098号ってかなり珍しい呼び方だけでも、他にいないよな。奴隷さんとか囚人さんとかに。普通の人におらんだろうけれども。

「あ、貴方、アオイって女の人に心当たりないかしら」

「アオイ？ああ、はい。心当たりありますよ。あれでしょ、パワプロに出てくる女性投手のアオイちゃんでしょ」

あれは良いボクっ娘だぜ。

「はあ、なんだ。オタクか」

俺は彼女と俺がオタクかどうか論議する必要があると思ったが、強く否定しても彼女の様な女には何を言っても無駄だと思った。これだからレッテル厨女は最低でござるな。

「リアル女よ。そうね、私の娘の旦那の母がそのアオイという方なので、7098号って人に捨てられたって言っていたからもしかと思ったのだけどもね」

このような所でのビッチの名前が出るとは世間狭すぎワロス。

「んなこたあどうでもいいんすよ。それよりも宇宙人っすよ。俺は

どうしたらいいですか」

「簡単よ。貴方がガツとして、宇宙人をグッとやっつけて、ハッピーにするだけの話よ。励みなさい」

なにその長嶋理論みたいなの。

「あの、宇宙人にやられた俺っちがどうして宇宙人を倒せるんですかい」

「うるさいわね。いい？ 倒す倒されるじゃないの。貴方は倒すの。そういうハートがブレイブするというあれが貴方には足りていない」

「いやいや、具体的にどうにか出来ないなら、無駄に負けるだけじゃねーすか」

「私の知っている博士がこんな事言っていたわ。

『科学の発展に犠牲は付き物』だって」

「しらねーよ」

「……なるほど。つまり貴方はもっとメカメカしたい、と。いいわ。貴方をもっとメカメカさせてあげましょう。原型が無くなる程にね」

おおう。この女史から妖しいにほいがします。具体的に言つと、とてもMADなにほい。

「電源offカモーン」

ちよつ、待つて。

俺はマシンだからなダダダッーン。

うむ。この光沢ある合金ボディにうっとりだぜ。

全長1.8m、総重量780kg。

無限小型誘導ミサイルに、無限豆ビーム連射銃、それに必殺技。あとは現地調達の小石。

最大3.0mまでホバリング可能のまさに剣と魔法の世界ではチート兵器なんだぜ、俺。

ウーンウーン

『宇宙人襲来宇宙人襲来。7098号発進お願いします』

来たな敵の宇宙人め

今日こそ俺が根絶やしにしてやるぜ。

「Oh」

「Oh my god!!」

度重なる謎の敵対組織である宇宙人の襲撃にどの街も活気がなくなるのは当然の事であろう。

いつ彼らがやってくるのかわからないのだから。

いつでも逃げれる様に日保ちの良い食料を用意できる家庭もあれば、明日への食事にも困る家庭もある。

働き手がいなくなったギリギリの家も、働き手がいても仕事のない家もある。病気で貯えを減らしながらなんとか生活していた家も、

宇宙人の襲撃により値上がった食料にヒーヒー言っている。

それに宇宙人が襲撃に来たらすぐに逃げれる様にしとかなければ死んでしまうのだ。

領主も備蓄を放出して配給をしているのもいるが、その配給も永遠に続けられるのではない。

さらにどうしようもないから降伏しようにも降伏のしようがない。争っているのではなく、一方的に襲撃されるだけだから。

上は貴族から、下の市民まで立場は違えど全員が疲れきっていた。

そして今日も襲撃がやってきた。

U f o から発射される熱線が容赦なく街と人を襲う。

焼ける家屋。焼ける牛。

必死に手を継ぎ逃げる母子。母の焦りがあつたのか、歩調が合わず母に引つ張られ子が転んでしまった。

早く起こし、逃げようとするも焦りから中々起き上がる事が出来ずマゴマゴしていた母子に影が。

母が空を見上げると、はつきりとu f o がこちらに銃口を向けているのが見えた。

この母にはアレがなんなのかわからないが、多分アレが街を焼き払う為の魔法具なのだろうと思った。

神よ。今まで信じてこなかったけれども助けてください。せめて子供たちだけでも。

その母の願いは通じた。

新手のだろうかサーモンピンクの鮮やかな極太の魔法がu f o を内包するかのように通りすぎて行く。

母があまりの熱量に瞼を閉じ、再びあけた時にはu f o はいなくなっていた。

「Oh!？」

神はおられた。

母はちょっとだけ信仰心がアップした。

「Oh……」

しかし、すぐ後に信仰心はダウンする。

何故だ。

それはこの母にはu f oも鉄人7098号も同じ鉄のゴーレムの変形にしか見えなかったからだ。

敵のゴーレム同士で何が起きたのかはわからないが、これはチャンス。素早く子供を引っ張り起こし、子供を肩車して走り出す母。

（やつこい息子の太股マジやつこい。ハートがマジキュンキュンしちゃうぞ）

7098号は迷っていた。

基地から発進したからだ。7098号の地理はアマゾネス村と思いついたくもないあの村とダンジョンのある街周辺しか知らない。

テンプレではその時その時で地理に詳しい人と友好を結べるが、7098号は出会えなかった。

あのテンプレ女史はナビ搭載しているから大丈夫だと言っていた。だから大丈夫だと信じた。

だがgpsがどうたらこうたらで地図がダウンロードされないとか表示されるのだ。

さらに内蔵されている女史との通信機も呼び出し音もなく現在お繋ぎ出来ませんの一点張りである。

しょうがないので基地に戻り、地図を借りて戻ってきたのだ。

その分タイムロスをしてしまった。

レーザーで焼けた家屋の炎で鶏が既に丸焼きになってしまっている。羽を筆り、塩を振っておけば香ばしかったものを。

悔やんでも悔やみきれないミス。

だが致命的なタイムロスではない。

助けた。人を俺が助けた。一人で出来たのだ。やったぜカーちゃん。

（あんたにしては上出来ね。えらいえらい。褒めてあげるわ）

脳内妄想カーちゃんがデレてキタコレ。

脳内妄想カーちゃんが褒めてくれたことにより、俺のやれば出来る子回路に電気が流れる。

やれば出来る子回路が無限のエネルギーを産み出し、俺の精神的ブースターと背中にあるリアルブースターに火が入った。

「うおおおお！！この世界はああー、俺があー！守るんだぜえー」

俺は雄叫びをあげ、無限豆ビーム銃を構えufoに向かっていくつ！！

俺のながい、長いテンプレはここからだ。

「ごめん。通信用の衛星打ち上げるの忘れていたわ」

「何で打ち上げていなかったんですか。そんなんだと俺迷子っちゃ

いますよ。いいんですか？ 迷子っちゃうんですよ。

そんなんだから俺、迷子っちゃったじゃないですか。嫌ですよ僕、そんなの。有ったやる気モリモリなくなっちゃいますよ、そんなじゃあ。

謝ってくださいよ。迷子らせてごめんなさいと、謝罪してください」

「正直すまんかった衛星。

でも今打ち上げる資材はなにもない。

迷子るんならとことんやろうよ」

「ちよつと言ってる意味がわからない」

「……うつさいわね。いい、ここは剣と魔法のファンタジー世界なのよ。

そんな世界で貴方をロボにして、チートな武装作って取り付けるのにどれだけ苦勞するのか解る？ どれだけ苦勞したかわかるの？

いい？ 資材の金属だけ持ってきて、これで近未来兵器つくって下さいですまないのよ。

それを加工する技術、資材を集める金、加工する機械の開発制作。

一人でやると時間がかかってしょうがないから信賴出来て頭の良い人の発掘もあるの。

そういえば穴を掘って燃料も発掘したわね。馬鹿な女が何も無い所の穴を無駄に掘っている。女は黙って穴を掘られているなんて下品な事も直接に間接的にも言われたわ。

私がテンプレシートとはいえ、一日二日で簡単にポンポン出来るものじゃあないの。

それだけじゃなくてよ。スパイ対策もしなくてはいけない。スポンサーのご機嫌伺いもしないといけない。研究したいけれども研究じゃない事に時間使わなくていけない。

いつもニコニコして、嫁にもいかないで遊んでばかりとか色々な陰

口に耐えて、好色爺の機嫌を悪くしないようにして、ストレスたまって、研究のためだと我慢して我慢して、ようやくの成果がアンタで、ちよつと忘れ事をしただけでなんでネチネチと言われなければならぬの。

そんなのないわよ。衛星打ち上げ装置も衛星も作れないのよ。アンタのだけで資材使いきつたし、スポンサーも皆逝ってしまったのよ。無いものは無いの。いい？大人でしょ。我慢なさい」

彼女は激しく言い切った。

肩で息をして、目の前に置いてあるグラスから水をグイッと飲む。

ぼくは、それをみて、おとなってとてもたいへんなんだな。とおもいました。

「なんかすいません」

「貴方が謝る要素は何一つないし、何を言ってるの？イライラする」

「謝る要素が無いことぐらい、俺だって知っていますよ」

当たり前何を言っているのだろうか。

女史のストレスがなんと30あがった。と思う。

「……」

「……」

「それだけっすか」

「なによ」

「いや、結局貴女がキレた。この話で結局出てきたのは貴女の言い訳それだけなんですよね。仕様のナビや通信機は貴女のミスで、そんな睨まないでくださいよ」

「と、父さん、貴方が父さんなんですネ」

と、そこへ一人のイケメンが突然扉を開いて現れる。

なんというイケメン。このイケメンは間違いなくイケメンの息子。

「会いたかったです父さん」

「娘の旦那に貴方の事を話したら会いたいつて言うから連れてきたのを伝えるの忘れてたみたいね」

第三者の乱入で気持ち少し落ち着いたのか、それとも身内にみつともない姿を見せたくないのか。

幾分かは怒りもおさまったらしい女史が寝耳に水な事を言った。

「……違うんじゃないですか」

「いえ、違いますよ父さんは貴方です」

「だってさ、目許とか似ていないよね」

彼は憎らしい程にキリツと爽やか愛され系イケメンアイ。

かたや俺は愛されザク系モノアイだ。どうみても似ていない！

「口ボだからな」

「それに口許もほら」

彼は憎らしい程にキリツとふっくらシャブリつきたい系小唇だ。
かたや俺はデッパリ愛され接続スピーカーだ。どうみても似ていない。

「ロボだからな」

「髪の色も」

彼は憎らしい程に爽やかふんわり愛され系ロング銀髪である。
かたや俺は年功序列無能指揮官用ザク系アンテナだ。どうみても似ていない。

「ロボだからな」

「そもそもロボの俺を見て、父さんだなんて普通の人は言えないよね」

「ロボだからな」

「それでも俺にはわかるんです。貴方の魂が間違いなく俺の父さんだって言っているんです」

なにそれ？チョーこえーよ。

「家族愛だな」

そう言ってうんうんなづく女史。

感動する場面でもないよね。

「お飲み物をお持ちし……あんたは!？」

「なんだ。姉さんまだ生きていたのか」

グラスの載ったお盆を持ち、驚いた表情で自称息子を見る女性。そういつて憎々しげにはきすてる自称息子。なにこの三流ドラマみたいな展開。

俺は女史の方を見る。けれども女史もいまいち理解出来ていないようだ。

とりあえずまとめてみようと思う。

俺。7098号。

女史。自称息子の義母。俺にサプライズのつもりだろうか、自称息子をこっそり会わせる。

自称息子。イケメン。つかイケメンくんこそつくり。

女性。どうやらイケメンくんの姉らしい。あとイケメンくんには好まれていない？

そんな所であろうか。

「どういつ事？」

「さあ」

俺と女史もわからなかった。

私は家族に愛されていなかった。

母と私と弟の三人家族で育った。父は知らない。

ご飯は粗末な物を少量与えられ、時には出される事がないという事もあった。

理由はわからないが私は母からも愛されなかった。

住んでいた村の人からも嫌われていた。村長の家と商家からは特にだ。

ただし、これは今思えば家族全員が嫌われていたのだと思うが、理由はやっぱりわかっていない。

唯一母だけは知っているのだろうが、そんな事を聞いても怒り小突かれるだけで終わるのだろうから聞いた事もない。

母には幼い頃からネチネチといびられた。

それを間近で見て育つ弟。弟は自分と違って母から愛されている。

弟が自分を下に見るのもある意味当然の流れで、母もそれを止める事をしなかった。

母の知り合いだというおばさんとその娘が来る時だけは違わなくてはいけない。

問題ない仲良し家族の演技をしなければ、そのおばさんが帰った後に母に折檻される。

そういう生活をおくり、私が年頃になった時だ。

もう限界だと感じた私は今年も遊びに来てくれたそのおばさんに頼み込み、やっと外へと巣立てたのだ。

で、色々あつてここで働いています。

「可哀想に、辛かったでしょうね」

女史、六枚目のハンカチを涙で濡らしながら、七枚目のハンカチへと手をのばす。

「いえいえ、違います。違いますから」

「何言っているの！？こんなに酷い事をしておいて。あんた娘にも酷い事をしていないでしょうね」

「まあまあ、片方だけの言い分だけでは、彼もたまつたもんじゃあないでしょう」

「ありがとう、父さん」

確かに俺の家はその人が言つた様に村の人からは嫌われていた。けれども理由はちゃんとある。その人が酷いからだ。

俺が物心ついた時は嫌われてはいなかった。好まれてはいない。それぐらいだったと思う。

その人が言つた様に村長家と商家からは激しく嫌われてはいたが、けれども嫌われる様になった。それにはちゃんと理由がある。

だいたいどの村でもそうだと思うが、子供は子供同士で集まるものだ。

俺らの村はそうであつて、好まれてはいなかったとはいえ、子供らの中にはその人と俺は受け入れられていた。

あれは何でこうしてこうなったのかは子細は覚えていないけれども、その人が突然にだ、

「ひゃあ我慢できねえ0だあっ」

とか言い出して幼い子供を殴りつけ始めたのだ。

俺らは必死に止めた。当然である。子供同士とはいえ、幼い子供と年長の娘。それだけでも力量差はあるのに不意打ちだ。

なんとか引き離し、突然ボコボコにされるは痛いはで泣きじゃくる子をあやして、家に連れて帰ってあげて、その間も奇声をあげながら暴れるのだ。

子供ながらに思ったね。お姉ちゃんがおかしくなった、と。

もう恥ずかしかったさ。女だから乱暴には出来ないけれども、必死に拘束するも、相手はお構い無しに暴れまわるんだ。で、

「覚めたわ」

とか突然いつて、何事もなかったかの様に家に一人でさっさと帰る。全員何がなんだったのかわからないかったよ。

ああ、違う。姉は悪魔にとりつかれた。皆そう思っただろうね。

当然、暴行を受けた子の親が夜中に怒鳴りこんできたよ。母と二人で頭をこれでもかと下げたし、その人の頭も押さえ込んださ。

で、まあ、そんな事をしていれば受け入れられなくなるのも当然で、それからもちよくちよく問題を起こしては頭を下げる日々。

そんな時にカーリーおばさん、ああその人が言うおばさんね。そのカーリーおばさんが叩き直してやると連れていつてくれたんだよ。

その人がどうしてここにいいのかはわからないけどね。

ふーん。そうなんだー。

すつこくどうでもいいやー。

「あつ、さーせん。俺、そろそろバッテリーやばいんで、充電してきますね」

そういつて俺はさっさと退室して俺の部屋に戻り、充電設備の上で充電モードへと移行した。
おやすミゼラブル。

バッテリーがフルになったとシステムがお知らせしてくれたので、充電モードから戦闘時以外モード別名省エネモードにする。
おはヨルダン。

センサーに四人感知したので半身を起こして、モノアイを動かして捜してみたら、すぐ側、充電設備の脇にたっていた。
イケメンくんとイケメン姉とおばさん。あと知らない女性。イケメン姉と知らない女性はなんか似ていた。

うん。おばさんはカーリーさんだね。久しぶりやね。

「おはよう。ぼく、そんな見つめられるとマイツチングなんだよね」
いちいちつまらないネタを挟まないとボク耐えられねえんだよね。

「7098号、スライムキラの7098号なんだな？」

「それは過去の話でやんすよ。今のあつしはただの鉄人やんす」

カーリーさんがプルプルとふるえているので俺は殴られると思った。
カーリーさんの拳が危ないっ！！

が、拳はやってこなかった。

「良かった。心配したんだ。すつごく心配したんだぞ。街が襲われ

たつて聞いて、お前がいなくなつて、死体も見つからなくて。良かった、良かったよお」

そついつてカーリーさんが俺に抱きついてくる。
え、なにこのデレは？なんでデレフラグたっているのかな。

「ああ、こんな変わり果てた姿で。でも良かった。会えて良かった。7098号。娘だ。前のお前に目元とかそっくりだろ。角度とか」

「初めましてお父さん。あなたの娘のインドラです。母からお父さんの話をよく聞かされていたので会えて嬉しいです」

「初めまして7098号です。うーん、親子だというのに初めましてつてのも不思議ですね」

「ですね」

そついつて、目の前の女性が微笑む。

カーリーさんと同じ小麦色の肌。銀髪のおかつぱに褐色とは実にいい。アマゾネス集落の民族衣装が露出の多い薄着の衣類からみとれる発育の良さ。身体も引き締まっている。

娘ではなければお近づきになりたい。けれども親子でなければ接点が無かつただろうとは実に残念だ。

「ところでカーリーしゃん。その男の人がボクは俺のムシユコでしうう。とかたわけた事ばかり口にしてしょうがないのでしゅ。

誤解を解いてあげてくだしやいませんか」

「……お前、記憶が混同してるんだな。あの子はお前の子だ。いいかお前の子なんだ。お前の子供、お前の子供、お前の子供。だろっ」

「や、常識的に考えても無理あるだろ。姉の方はともかくとしても、弟さんの方は時系列で考えても無理だろ」

俺貴女たちに捕まった。俺貴女たちの所で労働する。捕まってから半年後解放された。お腹がライジポン発覚。出稼ぎに行く。アオイtheビッチになる。逃げる。カーリーさんもライジポン。それから半年もたっていない。この時点でビッチの方の出産がもうそろそろ。奴らの襲撃で俺が消える。それから20年ぐらいたって今に至る。

「ほら、無理だろう」

「お前は……。ちょっと二人で話がある。お前ら席を外してくれ。玄関の所にあつた喫茶コーナーでこれで時間を潰していてくれないか」

懐から取り出した硬貨数枚を娘に放りなげるカーリーさん。

「修羅場らばんば。ふひひ」

「ほら行くよ」

「嘘だ」

ワクテカした目で俺らを見るイケメン姉と、なんかデンジャラスな目で呆然としているイケメンの襟を掴んで引き摺る様にして連れていく娘。

流石カーリーさんの娘だ。戦闘力は人の時だつたら間違いなく負けてるね。他も負けてるけれども。

イケメン姉とカーリー娘。どうしてこんなに差がついた。慢心、環境の違い。

退室してから彼らが話の聞こえない場所まで移動している時間が欲しかったのか、少し間をあけてカーリーさんの口が開いた。

「お前は相変わらずのバカだ。あの子はそれを信じていたんだ。確かにアオイは嘘をついた。それはいけないし、間違っている。けれどもあの子の気持ちも考えてやれ」

まあ、そうだよな。

「そらそうよ。でも俺の気持ちも理解してほしい」

「まあ、正直お前の気持ちはわからないが察する事は出来る。それでも、それでもだ。な、父親になってやれとは言わないが、少しは優しくしてやってやれよ」

「でもいきなり父さんだなんて言われても、ボク戸惑っちゃうよ」

起きてロボットにされたと思ったら、息子が出来ているんだもん。それだけでも驚きなのに、その息子は他人で、実はその姉の方が娘なんじゃねとかなっていたら、さらに娘とその母が会いにくるんだもん。

まさに超スピードでワロえない。

「そついや、カーリーさんは今まで何してたの」

「私か。私はあの子を産んで、すぐ預けてお前を探しにいった。三年くらい復興を手伝ったけれども、先が見えそうになると奴らがや

つてきてのやり直しで、しょうがないから里に帰ってあの子を育てていた。

特に話す事はもうない。アオイはまあ、元気にやっってるぞ」

「下半身が元気なんですネ。簡単に想像出来ます」

そういや、同じアマゾネスの里出身でもカーリーさんって貞操がストロングだよな。通り名が通り名だし。

かたやビッチはビッチだったな。

同じ種でも、ん？

俺の種である事が強く推測される娘は俺より酷い性格。間違っても美人ではない容姿。強いていえば愛嬌ある顔。まあ、似ているとはいえ、娘の性格は俺譲りだとしても、俺はあそこまでは酷くないと思いたいけれども。

俺の種じゃないイケメンくん。イケメン憎し補正を除いても、普通だよな。

両者とも昨日今日会ったばかりだけど。

で、カーリーさんの娘。

普通だよな。どちらかといえば美人だよな。百人中百人の男が振り返る程の美人ではないけど、振る舞いも目を覆う程は酷くなかったし、普通だよな。だから頑張れば充分優良男を捕まえて家族に恵まれた人生をおくれそうな女性だよな。

カーリーさんの娘って俺の種じゃあないんじゃない？

いや、まだだ。まだ、ではないかと思われる段階だ。焦るな。焦るんじゃない。

「どうした黙りこんで」

「やる事が出来た。すまないちょっと離れてくれ」

俺は俺の胴体部にまわされていたカーリーさんの腕を優しくはがす。

「あつ……。そうか。お前もいっぱしのソルジャーだもんな。頑張
ってこいよ」

「ああ、頑張るよ」

俺はそういつて部屋から飛び出していった。
何か勘違いしたカーリーさんを置いて。

「生きて帰ってこいよ」

俺たちの戦いはまだまだ続くんだぜっ！！

「博士、俺の身体まだありますか」

「あるわよ。それが何か」

「その俺のdnaで俺の子供判別機能を作ってください」

「嫌だし、無理よ。あいにく私は遺伝子さっぱりだもの」

そ、そんな。なんてこったい。

「そこをなんとかおねがえますだよ」

「無理」

「バーカバーカ、博士のバー」

俺の熱センサーがエラーを起こし、收音センサーがシャットダウンした。

「知ってる天井だ」

俺が目を覚ますと、そこは知っている天井、壁紙、見慣れた充電設備。

ここは基地内の俺の個室だ。

しかし俺はなんでこんな所に？たしか、メモリーをあさってみよう。

博士 イズ ビューティホル。博士 イズ マドンナ。博士 イズ ジーニアス。天才天才博士天才ひゃっほー博士サッサイコー
エビバテセイッ イヤッホオウー 博士サッサイコー
リピートアフターミー イヤッホオウー 博士サッサイコー

「イヤッホオウー、博士サッサイコー」

はああ、博士天才だよ博士。

もうすごい天才だよ博士は。具体的に言うと天才。マジパネエの。バファローブルベル造れそうぐらい天才だよ。間違いないね。

博士なら対光の速さのうんこ用便座を作れると思う。やったね地球。誰かのうんこで地球やばくない。

けど、今度はその誰かが危ない。博士ならきつと何とかしてくれるよね。マジ博士サイコー。

俺の中のメモリーから博士賛美のポエムがとまらない。

素晴らしい博士はとても素晴らしいのだ。

「おはよう7098号くん。気分はどうかしら。前とは違うでしょ。具体的にどう違うかは聞かないけれども」

素晴らしい博士が与えてくれた部屋の出入り口からやっぱり素晴らしい博士が俺なんかのために会いに来てくれたの。

博士はとても素晴らしい博士だ。

俺は博士を独占したい。孕ませたい。自分の物だけにしたい。強くそう思った。

俺は爆発した。

「はあ……こいつ本当にチートテンプレなのかしら」

女史のたいして素晴らしい声の音を再起動して一番に聞いた。勿論、今度も知っている天井である。エイチデーデーの中に保存されているデーターでは工作室だという。

俺はここで造られ、移植されたいのだがそんな事はどうでもいい。

「間違いなくチートですよ俺は」

ただし攻勢には向かないチートだけだね。

長丁場の一対一という限定された場合で、俺に戦闘適性があつたのなら有効なチートだけだね。

治癒納涼が異常に高くて、食事取らなくても大丈夫ってよく考えればそうだね。それが女たらしの遊び人とか。

まあ、考え方しだいであって、どう生かせるのが問題だって話だ。

「そういつてはにかんだ。と書いておいてください」

「……頭おかしいよ。この人」

正解じゃない。

「いい、もう私でいかわしい妄想したり、私を小馬鹿にしたりしない。怒らせない。

資材が本当にもう無いの。具体的に言うとな替のパーツは残り一体分しかないの。

それ壊したら、もう後はないの。いい、くれぐれも安易な行動とらないでね。不用意な行動も、うっかりも、フラグたつコメントもしない。しないしないの。何もしないしない。

大事な事だから二度言っただけでも、もう一度言っわ。しないしないの精神よ」

興奮した博士を見て、僕はこの人は短気な人なのだな、と思った。所で敵襲を告げるブザーが基地内に鳴り響く。

俺はやれやれと呟いて、カタパルトにONしたお。

敵襲されていて大変な街に着いた俺はおかしな物をみた気分だった。そういえば前世では都庁が巨大ロボになるとかいうネタがあった。世界は違えど、何処か似たり寄ったりする力が世界には働いているというから、そういう事なのだろうか。

俺は今、レンガ造りのロボが腕を振り回してu f oを撃退している最中の光景をメモリーに録画している。

頭部で輝く十字架の様な物。胸に輝くステンドグラス。

光がその頭頂部の十字架に吸い込まれる様に集まったかと思うと、しばらくして胸のステンドグラスからビームが発射され、腕の届かないu f oを撃ち落していった。

なんというか、彼の機体はいかにもな正統主役機みたいな感じなので、ブリキのロボみたいな姿の俺は彼のがちょっとうらやましかった。

まあ、先客がいるのであるからあれに任せて俺は先に帰る。しないしないの精神だ。

何もする事がないので俺は先日博士から貰ったマンガの代用の娯楽絵本の内容について考える事にした。

それは一人の農民の子供の家族愛を描いた作品だ。

突如村に襲来してきたケンタウロスなるモンスター。

家族、村人皆逃げる中、幼児と言っても過言ではない彼の弟達の足は遅く、何時しか最後尾になってしまった。

このままでは弟たちが危ないと思った彼は一人時間稼ぎの為にケンタウロスの前に立ち塞がる。

だがケンタウロスの槍にあっさりと貫かれてしまい絶命してしまう主人公。

だが、それを見ていた神は美しき家族愛にえらく感動し、彼を生き返らせたのだ。

そして、自分を貫いている槍を持上げ、ケンタウロスを投げ殺してしまった主人公。

絶命したのを確認した彼は落ちていたケンタウロスの槍に生きていた証として自分の名前を刻んで命の炎が消えてしまったのだ。という話だったんだ。

話の評価はさておいて、槍が刺さっている状態で投げて、その後に槍を拾うだあ？

ちなみに絵では槍は一本しかない。いつどのタイミングで彼を貫いていた槍が落ちたのか、もしくは抜けたのか些か疑問である。

刺さっているのを拾うって不思議だね。

俺はその絵本を充電器で充電しながら見ていると部屋の扉を二度ノックする音が聞こえてきたので絵本を見るのを中断した。

「いるの？いるじゃない。なにあんた、今日はやけに綺麗な姿ね。さっそくしないしないを実践したのかしら。でも報告はなさい。それはしないしないしちやあダメよ」

入ってきたのは女史だった。

「いましようと思ったのお。もういい。やる気なくなったからしな

い」

なんか叱られているみたいなので、全異世界テンプレ男からロボに転身したランキング暫定一位の俺としてはテンプレっぽい返答をするしかないじゃないか。

「はいはい。で、どうしてそんなに綺麗なのかしら。サボったというのならおしまいしてやるわよ」

「ほい」

俺は頭部にある大容量記憶装置の内の先程のを録画してあるメディアを一枚を渡そうと、頭からその一枚を抜いたら、俺はフリーズしていたらしい。
エラーですって。

「仕様よ」

「へー」

どうやら仕様らしい。ならしょうがないよね。

時刻は深夜。

フリーズした段階では夕方だった。これが意味する事は一つ。俺はほっとかれていた。という事。

女史に再起動してもらったら深夜とかすぐ再起動してくださいよという気持ちはあるが、こうみえてこの女史も中々忙しい人なんだから、俺なんかくだらない文句も言えないよね。

「そつえばあんたに客が来ているわよ」

と、この女史、突然である。

「客？誰だろ。光速の女騎士サラちゃんかな、それともカーリーさんかな」

「来ちゃった」

元口りでボーイッシュでパコパコさんが扉を開けて入ってきた。後ろには自称息子の姉と自称息子、自称息子の隣に赤子を抱いた知らない女の人もいる。

よかった。俺とは縁も所縁もない栄光でジャイアントな所の野球選手がいなくてよかった。

でもこのビッチファミリーはチェンジでお願いしたい。

「……」

「久しぶり、ごめんね。」

だって寂しかったんだもん。しょうがないよね。

でも一番愛してるのは今でも君だけだよ。だからさ、君さえ良かったらもう一度やり直そう。

家族一緒の方が良いよね。ううん、良いんだよ。多い方が賑やかで楽しいんだからさ。

そうだよ。家族皆で楽しいよ。でも家族なのに君がいなくて凄く寂しいよね。

じゃあさ、帰ってきなよ。楽しいよ。

そもそも君がいけないのだからね。ボクを寂しらせておいて、失踪するなんてヒドいんだぞ。

でもボクは君を許してあげるよ。だって君が好きなんだから。

あの人とはなんでもないので誤解してヒドいよ。二人の赤ちゃん出来るというのにいなくなつて、悲しかったんだぞ。

ほら、君の娘と息子だよ。って先に会つてゐるんだっけ。

もー、妻であるボクより先に君と会つてゐるなんてヒドいよね。ほんと。

君を一番に愛しているボクが誰よりも一番先に会つべきなのにね。

二人で教育出来てればこんなヒドい子に育たなかったんだよね。ほら、謝つてよ。

いままですまなかつた、つて家族皆に謝つてよ。

いなくなつてすまないって謝つてよ。

ボクは許してあげるから早く謝れ。

それで家族皆で暮らせるのよ。ボクと娘と息子と君で。

どう？素敵でしょ。でも謝らない君はいらないから。

ほら、さあさあさあ

謝つて！！謝れ！！謝りなさい！！

ボクらを捨ててごめんと、ボクを一番愛してと言いなさい。

許してあげるから。

ほら、孫だよ。可愛いでしょ。

でもまだ君の孫じゃあないから抱かせてあげれないよ。

謝れば君の孫だよ。抱きたいでしょ。ホッペプニプニだよ。

謝れ謝れ。さつさと謝れよ」

こんなにヒドいとは思わなかつた。

孫がどうのこうのって、それお前の孫であつても俺の孫じゃねーよ。しかももう片方のおばあちゃんここにゐるし、その人を前に何言つてゐるんだこのビッチは。

俺はうんざりした。

ふと隣を見るともう片方のおばあちゃんである女史と目が会つた。呆れているようだ。目が物語っている。

その人、あんたの娘の旦那の母親なんだぜ。

「7098号くん、浮気？浮気なの？」

そのおばさんが良いの？おかしいよ。すっごくおかしいよ」

「さーせんが、そのおばさんの血があんたの大好きなお孫さんに入ってるんですよ」

「うん、知ってるよ。けれどもおばさんには変わらないじゃん。おばさんでしょ」

「知ってるなら、そんな口の聞き方どうかなと改めてみたらいかげんじゃろ。ほら、殴っていいのは殴られる覚悟のある人とか言うじゃないですか」

「ボクはかまわないよ。存分に言ってくれてかまわないよ」

こ、こいつはダメだ。

こいつはビッチだけじゃない。頭が残念すぎる、人の痛みがわからない奴だ。

修正してやるっ！！

俺は大きく手を振り上げ、ビッチの左頬を殴り付ける。

「そんな大人修正してやる」
グシャア！！

「ヒイツ」

「キャッ」

あ、ああーん？

ビッチの頭が、無くなったただとお？

……そらそうよ。そうだな。こらあかんわ。

まさかの惨事に誰も言葉を発する事の出来ない室内。

その空間にドサツと頭部を失った女性の身体が倒れる音が大きく聞こえた。

床を赤が拡がる。

「あつ、あつ、ああ？お母さん？お母さん？」

「……」

やつちまった。

これは間違いなくただちに影響がある。俺は七回も言わない。一回だけだ。

と、幼児を抱いた女性は部屋を出ていく。
当然だよ。こんな所にいられないよね。

どうしよう。

さっきから俺の頭はこの責任をどうやって取るか。

どうしようという単語がグルグルと思考回路をまわっている。

が、次の瞬間。

何も言わない母にすがっていた自称息子の姿とビッチの身体が消え、
異形のモノが現れたんだ。

ぶん投げ最終回

異形の者は宇宙人の親玉だとわかった。

「ワレワレノ 観光地トシテ ヤクダタセテモラウ。汚物ハ殺菌ダ
ア」

長々と宇宙人の親玉は語ったけれども、まとめると簡単だった。

宇宙人社会が不景気で不満が頂点。

じゃあガス抜きがてら侵略すつぞ。

じゃあついでに観光地になりそうな所侵略すんべ。

という理由で行ってらっしゃい。

と悲しき中間管理職の彼はこの地にやってきたのである。

なんでビッチの身体に憑依したのかというと、偶然らしい。

偶然と言えば凄い偶然であり、必然ではないから偶然なのだ。勿論、

偶然だから理由なんてない。タマタマだ。

ならしょうがない。

俺は殺ってしまった事がこの様な結果になるとは思いもしなかった
が、こうなるところでどうした事やらと悩んでしまうものである。

この宇宙人を倒せばどうにかなるのかはわからないけれども、殺つ
ても構わないと思う。

そりゃあ、司令を殺された宇宙人は逆上して一気に制圧にくるか
もしれないと思う。

じゃあこの司令に脱出してもらおうというか、退去してもらえばそれ
はそれでどうなのかなとも思う。

一応アジト的な基地がばれちゃったんじゃない。ならそこを中心に襲

撃しちゃうよね。

じゃあ危険が危ないよね。 そうならない為に俺は戦っているんだから本末転倒？

あれこれ悩んだ所で悲しいけれども俺って労働者なのよね。

上司はいかがお考えかしらんとモノアイをぎよろつと動かして見たら、お冠でした。

ガス抜きがてら侵略しに来ましたーってそうなるわな。

上司がお言葉を発する前に察するのもしがない労働者の役目。

俺の鋼鉄の拳が宇宙人にヒットさせ、宇宙人司令は散った。

「勝った」

「勝ったのね」

宇宙人司令の命が無くなったと確認され、我らの基地は、我らの国は歓喜した。

これが96年歓喜の刻である。

それから三年後。俺はロボのままだ。

肉体はないのでしょうがない。

カーリーさんと仲良くダンジョンに潜っていたら落とされ穴に落ちてしまう。

落ちた先は暗いのでセンサー感度をアップさせたらスカルドドラゴンがいたので退治した。

そのスカルドドラゴンがドロップアイテムスカルドランサーをだしたので今夜は贅沢できるなと思いながら拾ったら、そのスカルドランサーにゲイルとかいう人の意志が入っていたので驚い

た。

帰りに武器屋に持って行ったら高く売れたので良かった。

俺とカーリーさんとカーリー娘さんと外食いった帰りの夜道。
俺は故自称息子の嫁に襲撃され、スクラップになった。

終わり

いま作った俺用年表

すんごい前：ゲイル産まれる

1年：色々あって新たな年号になった。

70年：テンプレ。

72年：宇宙人襲来。

72年：ビッチとカーリーさん和他アマゾネスさんら出産。

73年：これはやばいと女史召喚テンプレされる。

96年：歓喜の刻

おまけ

俺の名前は天符歴院 邪素照摩だ。

何処にでもいる普通で平凡な高校生だ。

ちなみに幼馴染は二人いる。

一人はボンツキュッボンツで絶滅した清楚なアイドルの様に可愛い女の子。絹の様にサラサラとした髪の毛。吸い付く様な肌触り。ちよつとたれ目がキュートな女の子だ。

彼女は大阪花子といってファンクラブ会員が一億人いる。

もう一人は東京太郎といってイケメンだ。がつつりしすぎない筋肉ボディはスマートで、お姉さんから幼女までスマイルを見せれば歓喜のあまり失神させてしまう罪深い男の敵だ。

野球をやらせれば毎試合完全試合。テレビの企画で実現したメジャーナリーガーのイチオー外野手との一対一の勝負では完膚なきまままでに打たれて負けたけれども、他の打者との戦いでは完勝してみせたぐらいだし、サッカーをやらせれば一人で無慈悲のスコアまで持っていく完璧超人だ。ちなみに彼もファンクラブ会員は一億人いる。

その二人に囲まれる凡人の俺は大変だぜ。

「邪素照摩くん、おはよ」

花子の顔が寝起きの俺の視界に飛び込んでくる。

（やれやれ。今日もか）

高校に入学してから毎朝花子が俺の部屋にやってくる様になったんだ。

俺の顔なんて見て何が楽しいだろうかな。

「おはよう花子。今日も君はビューティーホーだね。今日の君もまるで光輝き、何時でも僕らを優しく照らしてくれる太陽の日の様に美しいよ」

「……！！あ、う、うん。ありがとう」

俺は事実を言っただけなのに花子は顔を真っ赤にして俯かせた。俺はそれを見て風邪気味かとおでこをくつつけると確かに熱い。

「花子。美しい君にどうやら熱がある様だ。どうか安静にしてくれ」

「熱なんてないから大丈夫。大丈夫だから」

そういつて慌てて手を胸の前で振る。

「そうなのかい。それでも俺は君の事が心配なんだ。辛かったら何時でも俺を頼ってくれ。微力でも君の為にやるからさ」

俺なんかでは彼女の力になれないかもしれないが、それでも大事な幼馴染だ。俺なんかでも助けになればいいんだが。

「う、うん。ありがとう」

「花子も俺の大事な幼馴染だからね」

「幼馴染……か」

「？どうしたんだい花子」

「うっん、何でもないよ。それより時間」

そっいつて時計を指差す花子。

そっだ。確かにこの時間では少々不安な時間だ。

俺は花子が見繕ってくれた下着に着替えさせてもらった。

花子は甲斐甲斐しい女の子だ。一人でも着替えれるというのに俺を着替えさせてくれる。多分天使の様な彼女だ。将来は介護職か看護士になりたいのさろっ。その予行演習なんだきつと。

俺と花子は部屋を出て洗面所に向かい、花子に身だしなみを整えてもらう。花子は将来メイクの仕事につきたいのさろっ。

それからトイレに向かって花子に排泄の手伝いをしてもらう。

花子はやっぱり介護関係の職になりたいのさろっと思っだ。

手を花子に綺麗にしてもらって朝食なんだが、花子は将来調理関係の職につきたいのさろっか、毎食振舞ってくれるのだ。頬がナイアガラの滝の様に落ちる美味しさだから嬉しいんだぜ。

「いつてきますお祖父様お祖母様、お父様、お母様、お姉様、お姉様、お兄様、弟、弟、妹、妹、ふたなり、お手伝いさん、ポチ、タマ」

「いつてらっしやい」

「行ってらっしやいませ邪素照摩さま」

家族とお手伝いさんに見送られながら俺と花子は徒歩で二時間弱の距離の敷地外に出る。

「おはよー邪素照摩」

「おはよう太郎さん。今日も良い天気ですし、太郎さんも元気そうですねによりですよ」

「おはよー花子」

「おはよう太郎くん」

門をくぐると通学途中ですといった太郎が立っていた。

俺たち三人は並んで学校へと向かう。

太郎がネタをふり、俺がツツコミ、花子がそこからボケる。幼馴染トライアングルの完成である。

と、歩きながらお喋りをしていたらプツツと靴紐が切れてしまっているのに気がついた。

俺はしゃがんでどうしたものかと悩んでいると、突然突き飛ばされた。

「ギャッ!？」

へ?何で?かと思って頭を動かすと、仁王立ちする太郎の前にと、と、と、トラックだぁーっ!!

花子も同じ様に遠くへ突き飛ばされたのか、道路で横になっている。俺と彼女では俺の頭と彼女の尻が直線距離で一番短い状態だが、そんな事はどうでもいい。

俺は立ち上がり太郎を突き飛ばそうとしたが、間に合わなかった。高速で太郎へと向かうトラック。

立ち塞がる太郎。

そしてインパクトの瞬間、俺は目をそらした。見たくなかった。

グシャアアア

トラックが鉄くずになる音が爽やかな朝の通学路に響き渡る。

ああ。やっぱり。

平凡な俺だったら簡単に押し潰してしまうであろう高速走行中の大型トラックもチートな幼馴染の太郎の手に掛ければ鉄くずになってしまうのではないかと思っていたが、案の定だった。

「邪素照摩くんケガない？」

俺がその場でやっぱりな結果に啞然としていると花子が近寄って来ていた。

「あ、ああ、ありがとう花子…… よっ、と」

花子が俺に手を差し出して来たので、女の子に引つ張りあげてもらったというのも、男的にちょっと恥ずかしい気持ちはあるが、ここで手を取らずに一人で立ち上がると花子は寂しそうな顔をするのだと思うと、俺はそれを見たくはないので素直に差し出された手を掴んで、引き上げてもらう。

俺は衣類についた汚れを軽く手で払う。

トラックの運転手は外に投げ出され、失禁しているようだった。

「ありがとう太郎。太郎のおかげで助かったよ」

トラックの残骸から落ちる油。

それが太郎の衣類と手を汚して行く。

イケメン太郎はイケメンだ。だからその油汚れでさえも太郎に似合っってしまうのだ。

だが、それはそれとして、本人はあまり気にはしていないだろうが、これから勉強なのである。

ならばクラスメイトもそうだし、総勢一億の太郎ファンクラブの人
も太郎が油汚れているとなると、ちょっと残念に思うのではないか。

「なあに、俺たち親友だろ。なら当たり前さ」

そう言っつてニカツと笑う太郎。彼の太陽の様な笑顔で半径150m
に閃光が走った。

俺たちは慣れているから大丈夫だが、空を飛んでいたカラスは落ちて
いた。

「油で汚れてしまうのは悲しい。こんな事もあるつかと君の換えの
制服がここにある。どうか受け取って欲しい」

俺は鞆の中から太郎にびったしの新しい制服と手拭き用のタオルを
手渡す。

「何だよ、気にすんなって言いたいけど、あんがとな」

そう言っつてニカツと笑って閃光が300mに走った。

太郎はその場で着替え始め、突然焚かれるフラッシュの嵐。一億の
ファンは何処にでもおり、彼ら彼女らは太郎の生着替えに夢中なの
だ。

俺は振り返って花子を見る。

やっぱり絹の様な花子の膝小僧に擦り傷ができていた。これも悲しい。一億のファンも悲しく、代われるものなら彼女に変わってその痛みを引き受けたいだろう。

こんな事もあるうかと用意していたスプレー消毒液を鞆から取り出し、それを彼女の膝小僧に吹きかけた。

「ひゃあうん」

「美しい君の肌にこんなのは似合わないけれども、傷なんてもっと似合わない。

だから、こんな事しか出来ない俺を許してくれ」

「う、うん。もちろんだよお」

やはり熱があるのだろうか。花子の顔が赤い。

「花子、何度も言うが体調が悪かったら俺を頼ってくれ。代わってやる事は出来ないけれども、大事な親友の二人が苦しむのは実に辛い事なんだ」

「だ、大丈夫、大丈夫なのお」

そうか。

俺はまだ頼りないのか。すまない。

俺は真つ赤な顔で地べたに座り込む花子をお姫様抱っこして学校へと太郎と一緒に向かった。

ファンクラブに刺されない様に願いながら、だ。

「きゃー邪素×花子よぉー」

「俺は太郎×邪素がいいと思うんだぜ」

そして放課後。

花子はエクストリーム茶道部がある。

太郎は近々大会のあるカンフーサッカー部の助っ人として練習に行っている。

たいして俺は部活動をしていない。だから一人なのかと言えば、そうでもない。

花子ファンクラブ内、邪素×花子派なる人達と太郎ファンクラブ内の太郎×邪素派の人達が、両ファンクラブ内の太郎×花子派から俺が襲われるとか言うので、彼らが自主的に警護してくれるからだ。そんな事を言っても俺は俺なんが襲撃されるなんて思っではないが、彼らのおかげで寂しく下校せずに賑やかに帰れるのだからありがたい。

彼らとうどんのスープが関西圏と関東圏のどちらかが好ましいか意見を交わしながら歩いていると、歩く先にマンホールの蓋程の直径の球体が空に浮かんでいるのが目に入った。なんだろう。これは。

俺はその謎の球体にえらく興味が惹かれた。手を伸ばし、触ってみようとした瞬間！！

「破ッ！！」

後ろから寺生まれの娘さんが何処からか取り出したお札を球体に投げつけたではないか。

お札は球体に張り付き、激しくスパークする。

俺は何事かと寺生まれの娘さんの方を振り返ると、彼女は額から汗を流し、手を胸の前で組んで、見るからに必死な様子でブツブツと

呟いていた。

俺はそれを見て、ただ事ではないと思い、ポケットから木綿のハンカチーフを取り出し、邪魔にならない様にソフトタッチで彼女の汗を吸水させていく。

木綿のハンカチーフも一枚、また一枚と汗でビショビショになる。闘いは以前激しいみたいだ。俺のハンカチーフも残り三枚になり不安に思っていたら、後ろから肩をトントンと叩かれた。

この大事な時に何事だと思いながら後ろに振り返ると、太郎ファンクラブの少女がハンカチの束を持って立っていた。

「皆のハンカチです。これを役立てて下さい」

「ありがとう。優しい君たちが親友のファンで俺も嬉しいよ」

彼女を不安にさせない様に笑顔でそれを受け取った。

後ろから携帯電話の写真機能を使った時に出るシャッター音が聞こえてくる。

これでハンカチは併せて7枚。彼女から滴り落ちる汗を不安なく吸水出来るかもしれないが、時間との勝負だ。

頑張ってくれ。俺は思いを込めて彼女の額の汗にハンカチをソフトタッチさせていく。

球体もマンホール蓋からバレーボールのボールぐらいサイズになっている。

皆の思いがつまったハンカチを使い、彼女の汗を拭き取る。

頑張れ頑張れ。皆がついているぞ。

写真撮影でそれを皆も応援しているぞ。

頑張れ頑張れ。俺も頑張るから。

そして遂におにぎり大サイズになり、ピンポン球、米粒となり、不

思議な球体は消えた。

「はあつ、はあつ、あ…… 邪素照摩殿、ありがとうございます。拙僧はまだ未熟故に時間がかかってしまい、申し訳ない」

「そんな事はない。だが、君がいなければ大変な事になっていたんだろう。ありがとう。」

アレは何なのか教えてくれないかい」

どうしてか落ち込んでる彼女に、何でもない、気にしていないから気にするなという意味を込めて、最上級の笑みを浮かべて彼女に話しかける。

「…… 邪素照摩殿…… いあ、あ、はい、あれはおそらく異世界から召喚の為の呪術かと思われます」

「異世界？ そんな…… どうやら俺は君に救われたみたいだ。ありがとう。本当にありがとう」

「い、いえ。そ、そんな頭を下げないでください。そんな事をされたら、拙僧は……」

「拙僧は」

「いえ、何でもありません故におきになさらないで下さいませ。そうです。なんでもありません」

彼女は顔を真っ赤にして気にしないで下さいと連呼するが、彼女も風邪気味なのだろうか。

俺はお姫様抱っこして彼女を彼女の家まで運んだ。

それから彼女を彼女の家に送り届け、自宅まで歩いて帰ったのだけれども、自宅の門の前に般若の如き形相をした花子に服をクンカクン力されたかと思うと、

「女の匂い？いや、牝臭い？どういう事かな」

と詰問されたので、放課後にあつた事を話した。

そうしたら花子はなお般若の

如き形相のままブツブツと

呟き、俺の家の隣の花子家族宅まで歩いた帰って行つたので、俺は大丈夫なのかなとしんばいに思った。

翌日、花子はこなかった。

学校にもこなかった。

太郎と心配だねと話し、取り敢えず俺が花子宅に見舞いにいく事になった。

で、放課後。寺生まれの娘さんと二人で帰宅。寺生まれの娘さんは花子ファンクラブだという事で二人で花子宅へ行つたのだが、家族の話しでは起きてこない花子を心配して部屋まで見に行つたらいなかったらしい。

俺は心配なので個人で思い当たる所を搜索してみる事にした。大事な大会前の太郎に花子失踪したと教えるのどうかなと思つたが、太郎は俺とは違つて強いので大丈夫だろうとも思い、部活中だろう太郎にメールを送つといた。

俺はまず、密林の森林地帯へと向かつた。

当時、ヒヨッコ傭兵だった俺と彼女は敵味方に別れ、やりあつたのだ。

先輩傭兵のマリヤ姐とはぐれ、スコールに襲われ洞穴に避難してい

たら、そこに彼女も来たんだったな。男かと思ってたらついてなかったんだぜ。ビックリだったよ。

さらに帰国して自宅に帰った時に隣の家の人だってわかった時は互いにビックリしたよな。

俺が思い出の洞穴の場所に行ったが、いなかった。

次は中学校の体育館だ。

確かあの時、終業式をサボって屋上で寝ていたら、体育館がテロリストに襲撃されたんだよな。

同じく終業式を抜け出し、教室にいた花子と合流して体育館の上の鉄骨部分から強襲したんだよな。

その思い出の場所には寂しくバレーボールのボールが挟まっていた。

俺は学校を休んで捜し続けた。

太郎と俺と花子で行ったカラオケ、映画館、ゲームセンター。

二人で行った思い出の戦地、戦場、駐屯地。

何処にもおらず、はや半年。

俺は気がついた。俺は花子にフォーリンLOVEなのだと。

自分の思いに気がついた時には彼女はいない。

それからさらに半年。

俺は留年した。彼女を捜していたら出席日数が足りなくなっていたのだ。学力的には問題なかったが、足りないものは足りないのだ。

テストで合格出来れば進級させると言ってくれたのだが、花子が帰ってきた時に、俺らだけ進級していると寂しいだろうと断った。

そして一年後。

太郎は卒業後に結成したバンドが世界的に流行し、世界各地でライブをしてまわっている。

ただ、まだ花子は見つけれないらしい。

俺はまた留年した。

今度は出席日数は足りていたが、やっぱり花子と共に卒業したいからだ。

寺生まれの娘さんは卒業した。思い出に第二ボタンを下されと言われたので、逆じゃあないかなと思ったけれどもあげた。

今年度最後の終業式の帰り、家の前に花子がいた。

見間違いではないのだ。花子だ。

彼女も俺に気がついた様だ。

彼女が走って俺に近寄ってくる。

俺も走って彼女へと向かう。

俺と彼女の距離が一步一步近くなり、そして後一步だ。

彼女が俺に飛びついてきた。

俺も彼女をしっかりと抱きしめる。

「邪素照摩くん、邪素照摩くん。

私、殺ったよ。邪素照摩くんを拉致しようとした泥棒をしっかりと殺ってきたよ」

「ああ、お疲れ花子、心配したじゃあないか花子。

好きだ。俺は花子が好きだ。美しい花子が好きだ。君だから好きだ。だからもう勝手に何処かへといかないでくれ。俺の側にいて欲しいんだ。

俺も心配だった。太郎も、家族も俺の家族も皆心配したんだ。帰ってきて良かった。お帰り花子」

「邪素照摩くんただいま、私も邪素照摩くんの事好き。愛してる。

あの時、出会ってからずっと好きだったし、今でもLOVEだよ」

「結婚してくれないかいこの世で一番可愛くて美しくて、一番愛している花子」

「OK」

それから復学した花子と一緒に卒業し、卒業後、籍をいれた俺たちは子供が出来て、孫が出来て、ひ孫が出来そうな今もラブラブなんだぜ。

まあ、モテナイクンには程遠い幸せなんだけどな。プツ。

花子は激怒した。

愛しの男、邪素照摩に自分の香りを付けた泥棒猫ではなく、愛しき男邪素照摩をテンプレなる力にて異世界へと召喚しようとした愚かな者達にである。

花子の世界は狭い。

邪素照摩かそれ以外だけである。

世界を知る為に連れ回されていた最中、敵であつたにも関わらず、熱を出して死にかけていた私を看病してくれた、あの幼き頃の日から今日に至るまで彼女の世界は邪素照摩一色なのである。

何故私から邪素照摩を取り上げようとするのか。

そういう輩はどうしたらいいか。そういう輩は殺してもかまわないよね。

花子は邪素照摩に付着していた魔力の残骸を採取し、コマケークota
アイインダ理論を使い、相手の世界座標、年代を調べ、ゴツゴウシ

ユギ理論に書いてある方法で愚かな世界への片道切符を手に入れた。

そこはよくありそうな剣と魔法の世界だった。

こんな所に私の邪素照摩きゅんを拉致しようだなんて許せる要素がないじゃあないの。

花子は再度激怒した。

召喚しようとした人達は花子を異世界の勇者といきなり呼んだのだ。魔王がどうたらでこのままで人間やばい。と彼と彼女ら王族も言う。だからどうしたと花子は思った。

これは戦争なのだ。種の戦争なのだ。滅ぶか滅ぼすかの二者択一なのだ。

負けるとなったら女子供にでも武器を持たせ戦え。負けたら何もないのだろう。

お前らはなんだ。自分らは死にたくないからこんな安易な手段をとったのか。

花子は一流ではなかったけれどもソルジャーだった。

そのソルジャーの血がゴツゴウシュギ理論でのワープと重力や魔力、世界の違いなどにより、開花した。

次の日、ゲーム機のリセットを押すのと同様の難易度で魔王軍を滅ぼした。

その翌日、魔王軍全滅を確認して浮かれてパーティーを開いた愚か者たちを滅ぼした。

そんな事は関係ない国民も滅ぼした。一蓮托生だからだ。

お前らのトップは愚かだ。その愚か者の下にいるお前らも当然愚か者だ。なら同じだから、一緒に滅ぼしちゃうよね。

平になった国土。びつくらこいた隣国は調査にやってきて、見つけた花子に剣を向ける。

こいつも愚か者だ。そんなのを雇用している奴も愚か者だ。

同じロジックで隣国を滅ぼし、あとはその繰り返しだった。

残り一国。

その国は他の国とは違い、調査にも来なかった。

これには花子もビックリだ。

興味が湧いた花子は堂々と入国してみたのだが、なんとufoが襲撃してくるではないか。

流星の花子も生身ではufoに勝てなかった。

そう。生身では。

花子は賢い。具体的に言うと、未知である筈の魔力を採取して、そこから作者が鼻くそ穿りながら書いたゴツゴウシュギ理論と尻をかきながら書いたコマケーコタアインダ理論で異世界へと来れるくらい賢い。

生身で勝てないなら、武装すればいいじゃない。

巨大ロボとか邪素照摩きゅん好きだったよね。じゃあ、ここで魔力とか使って、巨大ロボ作って、作れたら戻った時に作ってあげて、大好き邪素照摩きゅんに褒めてもらって女子力アップだぞ。

襲撃にあって宿屋もとれなかったのでお世話になっているレンガ作りの神社に魔力とイメージを伝わせる。

そして出来たのがヤシロンエースクロスだ！！

唸る拳！！放たれるクロスビームス！！

強いぜ！！格好いいぜ！！僕らの、僕らのヤシロンエースクロス
オオオースッ！！

取り合えず、目的はもう済ませていたし、ロボも作れたし、やる事ないから花子は宇宙人テクノロジーの残骸を利用して、そのまま帰った。

そしたら愛しき邪素照摩きゅんに求婚された。

勿論OKだけれども、びつくらこいたよ。

それから学校に復学出来たんで、通ったんだけど、邪素照摩きゅん優しいから待つてくれていたんで一緒に卒業出来たし、すぐ籍も入れてくれた。

ヤル事もやっていたら妊娠した。喜んでくれたから私も凄く嬉しい。それから孫も出来たし、ひ孫も近々。おばあちゃんになっても愛してくれてるし、おじいちゃんの邪素照摩きゅんはマジ邪素照摩きゅん格好いいからゾッCON LOVE。

まあ、お前ら女子力足りない奴らには程遠い幸せなんだけどな。

太郎は卒業したけれども心残りがあった。

それは太郎の幼馴染の少女花子が突如失踪したことだ。

太郎はもう一人の幼馴染、邪素照摩と花子の事を大事に思っていた。だからその事を聞いた時、強いショックだった。

後日あったカンフーフットボールU22ワールドカップ選手権大会でも一試合平均8病院送りにしか出来なかったのもそれが物語っている。

邪素照摩は花子を探す事に一生懸命だ。

俺も何か力になりたいが、思い当たる所は既に搜索済だ。

そんな時、俺は世界的に有名な人から誘いを受けた。

「ロッキュー」

これだ。

俺は俺が出来る事を見つけた。俺が作ったバンドが世界的に有名なバンドになれば、世界公演で世界を巡る。

その時、ついでに花子を捜そう。

それから俺は誘ってくれた彼らについて行き、この音だと感じる人たちを見つけ、

バンドを結成した。

楽しかった。ラジオ局巡り、小さなライブハウスや酒場で仲間と公演するのは。

それは長くは続かなかった。

すぐにヒットした俺達に入った収入は俺たちをギスギスとさせ始めた。

客の前だけでは俺達は仲が良かったんだ。

世界を巡り始められて、やっと目的の花子捜しも仲間には気に入らなかつたろう。

いつしか俺はメンバーから孤立していた。

そして花子が見つかったと聞いた時、俺はドラッグで捕まった。

俺を引き上げてくれた有名な人は

「イツツあ ロッキュー」

と笑ってくれていたが、俺はもう疲れていたんだ。

日本へと帰って、地元で趣味バンドしつつ働き、おっさんになってしまった。

そんな時だ。

俺が朝起きたら隣に邪素照摩夫妻の娘が何でか裸体で隣にいたのは。妙に懐かれているとは思ったけれども、まさかという思いだ。

こんな俺が、幸せになっても良いのかと思ったけれども、良いに決まっているよな。当然だよな。

まあ、お前ら渋いおっさん力足りていない奴には娘の様な年の若い処女だった嫁が出来る幸せなんて程遠いんだけどな。プツ

エピソードジャナイ

顎骨をカタカタならす。

そうするとロリでボーイッシュな幼女が喜ぶ。

喜ばれると俺も嬉しいから調子にのつてもつと激しく顎骨をカタカタとならす。

幼女が頭部にonしてご機嫌であります。

ゲイルでした。

ドラゴンゾンビになって色々あったけれども、村で楽しく生活します。

あ、ドラゴンゾンビからスカルドラゴンへと進化しました。

水を飲んでもただ漏れです。

俺の煩惱が脳みそこねこねによりスパークし、それが大気に満ちている性属性マナと俺のこねこね脳みそを触媒に奇跡的な結合した結果、俺は俺のままにスカルドラゴンになったとテンプレ神が言っただ。

そうである事はそうであって、小難しい理論であーだこーだと聞かされてもわからないし、解ろうとする気持ちもない。偶然そうなったからよかったねという話で良いのだ。

最初は怖がられていたけれども、復活してすぐに走り出し、近くにいた泣き黒子のしっとり巨乳未亡人のスカートをペロンなとめくつたら、なんか無害認定されたみたいく、そっから農耕馬と張り合う様に農作業の手伝いされたら集落に受け入れられたみたい。

平和というか、お人よしというか、ご都合主義過ぎるというのが、俺はそれで良いのかという思いが頭によぎった。

馬と違って食費がかからない。

馬よりは自由にお願ひ出来る。

維持費がいらないし、勝手に住み着いて手伝ってくれるなら懐もいたまないのでOKなんだろうと思う。

水汲みに桶を持って出て来たお氣に入りの幼女ちゃんを頭に載せてご機嫌で帰る。

野郎は一律お断りだ。

残念な事に鼻とかが殆ど死んでいるのでクンカクン力出来ない。

俺は何も感じない。熱も臭気も感触も何も感じない。

念願の幼女の太ももに挟まれても、幼女が俺の頭に跨いで座っているという事実しかないのだ。

体温も匂いもぷにぷにも何もない。

はつきりと言えば、幼女がお漏らしを俺の頭部でも何も感じない。

頭が濡れているとかアンモニア臭とかも感じない。

上の幼女というか、今も集落の少女から幼女まで、誰にもそんな事をされた事はないし、そんな事をされても誰も嬉しくないだろうが。

俺は男で女の子が好きだったから女の子しか頭に載せないわけではないのだ。

野郎というか、この集落にはクソガキしかないのだ。

頭の上で放尿されて嬉しい奴がいるか？目の前を黄色の小さな滝が放物線を描くんだぞ。

競う様に、飛距離勝負だとかいって代わる代わる放尿し始めたんだぞ。

足をバンバン蹴られて嬉しい奴がいるか？俺は骨しかないんだぞ。折れたら一気に終わりなんだぞ。

クソガキしかないわけではないが、クソガキ率が高く、普通のお子様ならのついても構わないと思っていただけ、クソガキに見つかったら煩いので載っけない。

弟はもう俺の上に載ってはしゃぐ年齢じゃあないから載つけない。

弟は成人したよ。

男勝りの女の子を嫁にしていた。

聞いた話だと俺に惚の字だった娘を、お俺がいなくなって傷心状態の娘さんを弟が慰め、弟を意識し始めた娘が無事弟をgetしたらしい。

別に、二人とも幸せになって良かったねという気分だ。

ロリ幼女がロリになって、人妻になった。

この歳になると流石に骨がもう限界に近い。

既に何本かに亀裂が入っているし、軟骨もとうに擦り切れてしまっている。幸運にも神経は無い為に骨がこすれて苦痛だとかはないのだけれども、もう田畑を耕す道具を引く事も出来ないし、倒壊してしまうかと思うと危なくて幼女は載せられはしない。

弟の子を載つければ良いが、その子供は載つけないのかと思うと残念な気持ちになる。それにロリでボーイッシュだった今は人妻ちゃんの子も載つけない。

なるほど。これが寿命という物なのか。

俺は今まで現代人、ちびっ子と生きて、ドラゴンゾンビからスカルドラゴンになり、これが三度目の生であるが、天寿を全うするのはこれが初めてなのだ。

初体験ではあるが、思う様に動かせないし、動かしてはいけないこの身体がもどかしく思う。

老人もこの様な気分を味わっていると思うと前世、前々世でもっと祖父母を労わっておけば良かったと後悔する。

俺は太陽光を浴びながら地べたで寝ていたら、夢の中に久しぶりに我が神テンプレ神が訪れた。

「あい、お疲れさん」

なるほど。俺はここまでのようである。

となれば色々昔の事から最近会った事を思い返してしまった。

ふむ。これが走馬灯という物なのか。

死ぬとわかれば楽しかった事、苦しかった事、色々な事を自然と思
い出してしまう事が走馬灯なのか。

死ぬ前にわかったは良いものの、この解釈を話す相手とはもう会え
ない、眠りにつくのかと思うと俺はとても残念だった。

そして俺は転生した。

またかと思う人はそれが正しいのだと思う。

他人事ならば俺もそう思ったであろうが、自分の事なのでコメント
はしたくないし、そもそもコメントする相手もいなければ、する必
要もないのだ。

今度はSFかと航海中の宇宙船から宇宙を眺めながら考える。

この船には危険な生物もいなければ、丸い自作ロボに四角を意味す
る言葉を名付ける人もいないので平和な船だと思う。

ベヒーモスはトラウマである。

船長がそれはお気の毒にとか言い出したらその船は間違いなくトラ
ブルが起きている船だ。そんな事もないし、船のマザーコンピュー
ターも今の所は大丈夫だ。

視線をテーブルに戻し、上に置いていたコーヒーを手に取り、一口
に運ぶ。

口に広がる酸味と苦味。そして口内を突き抜けて行く香り。うん。これはインスタントくさい味だ。

俺はよくよく考えてみればコーヒーなんてそんなに興味ない。コーヒー党には申し訳なく思うが、コーヒーの事など、あれば嬉しいよね程度のランクである。

宇宙や大自然というのは何時の世も偉大であり、感動的なのだ。

雄大な景色に、人間なんてちっぽけな存在であり、俺一人が立ちションした所でなの一つ問題なさそうな存在だと感じさせてくれる。

ピーピー

甲高い電子音が鳴り響く。

これは艦内放送があるという報せ。

『諸君、艦長だ。』

ワープして侵略せよとの指示があったから、そういう方向でよろしく頼む。以上だ』

そうか。

俺は手元の情報端末機を操り、今後の日程をみると、ここから遠くもなければ近くもない所の星に遊びに行くにあったのです。

わーい、おやつは50統一ドルまでですか？とマザーブレインに送信したら6000ウオンと返ってきたニダ。120倍ニダ。

とはしゃいでいたんです。けれども、これは遊びではなくて、戦争しに行ったと気がついたのです。

必死に ボタンを連打して、名古屋撃ちとかして、侵略したら口ポットが出て来て、やべーので帰った。

ヤバいのはヤバいよね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1451y/>

俺のテンプレ

2011年12月5日21時48分発行